

015796-000-6

特61-61

因縁百話

吉村 雄鳳/編

M43.12

ABC-1545



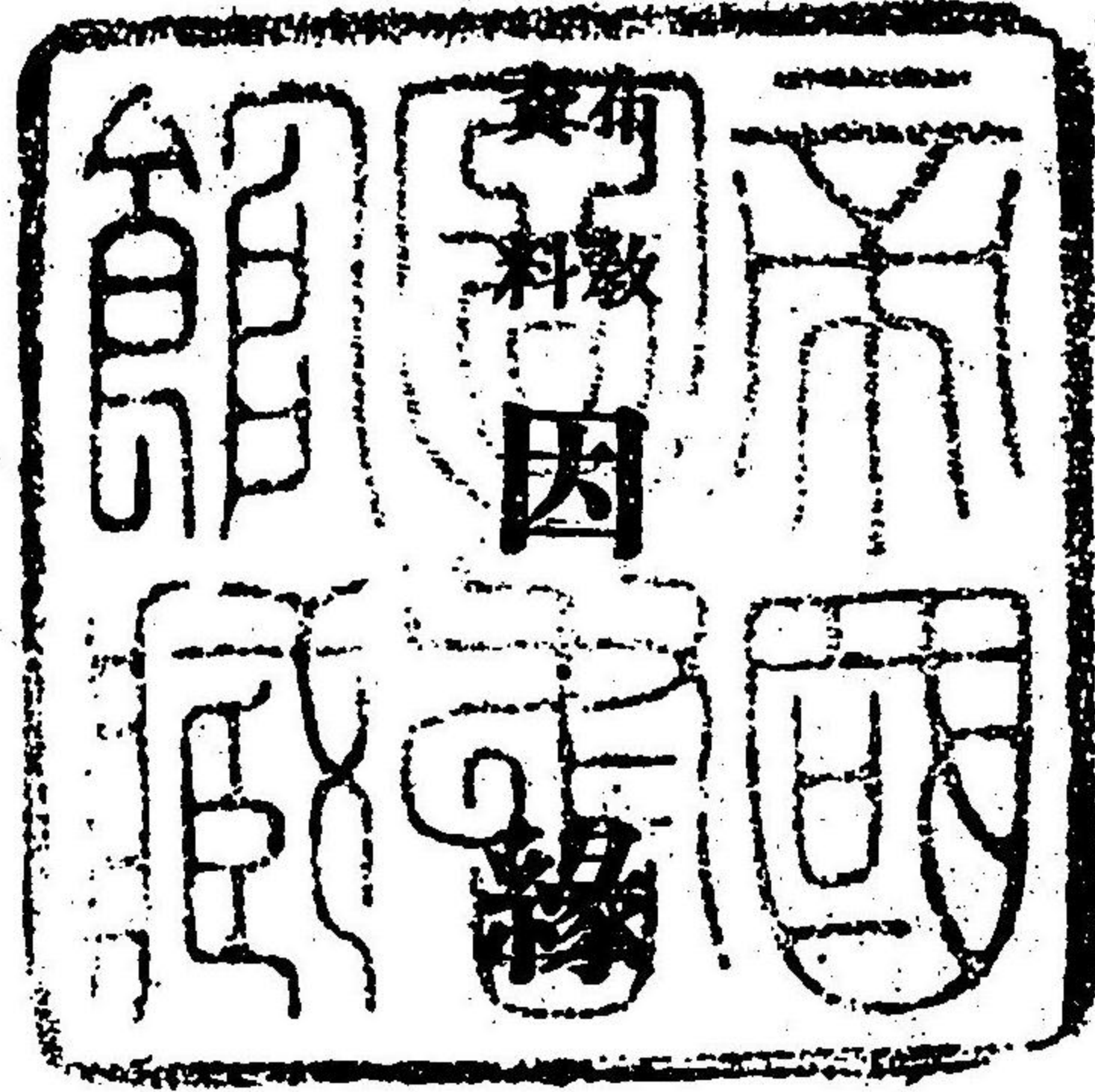


261

751

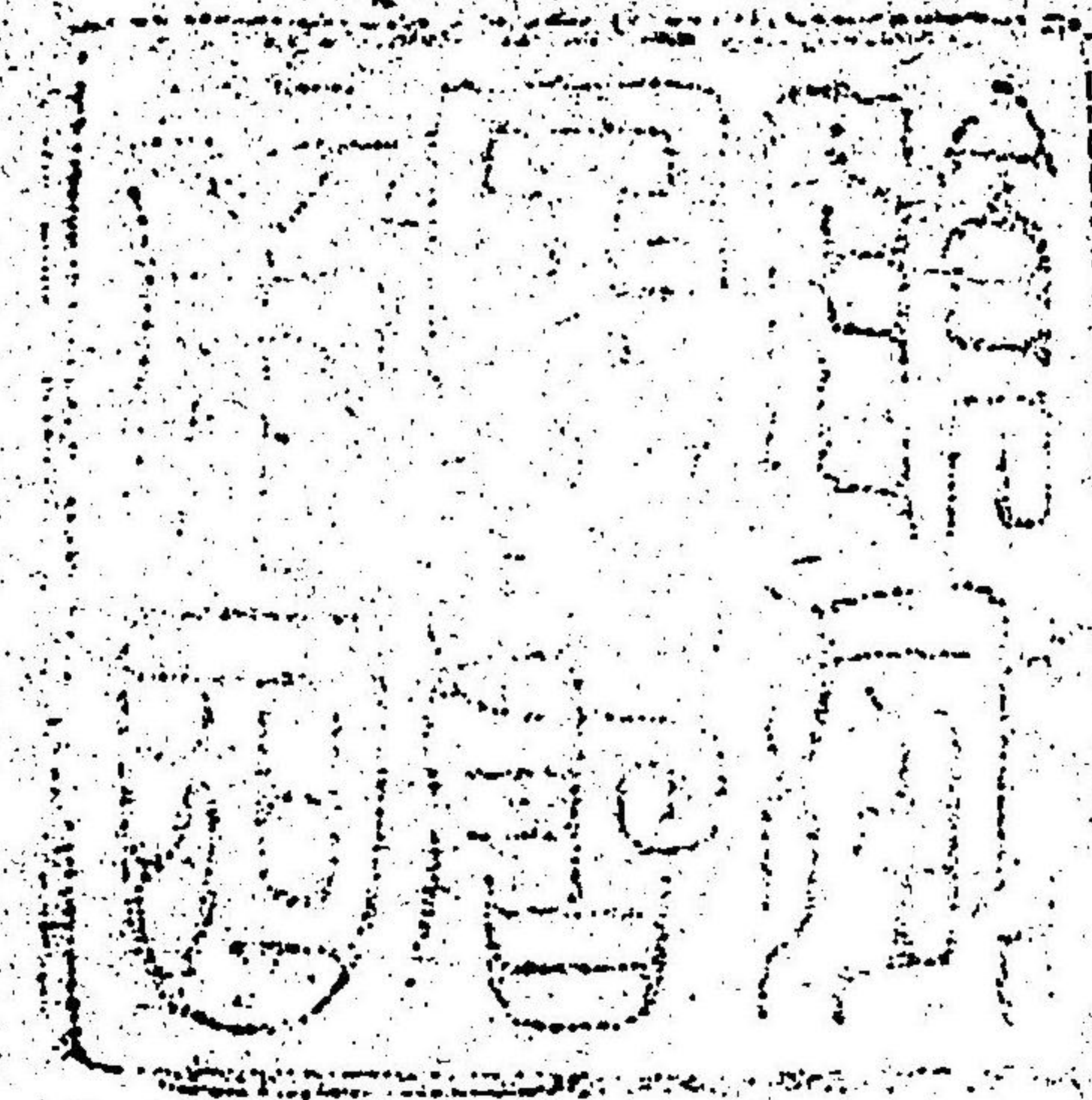
特 61 :

61



百

話



序

本書一冊、敢て天下の布教師に資せんと
にはあらず。『説教の一席も稽古しやうか』
と志せる、沙彌、沙彌尼の料たるを得ば、
予の満足する所なり。序に代ふ。

明治四十三年十二月成道忌の日

吉村雄鳳識

注意三則

- 一。話、百、別に順序あるに非ず。唯、筆のまに、録し、のみ。又、約して因縁と云ふも、譬喩を含み、百話と云ふも、其實、百十余話を載せたり。
- 一。話に關聯したる、經典、祖語を引證せしは、初學者の爲に、因縁、譬喩の引用法の、一例を示したるに過ぎず。
- 一。話の事實は、過誤なきを期したれど、若し、ありたらんには、大方の諸師の高教を仰ぎて、他日、訂正する所あるべし。

資布料教 因縁百話目次

因縁百話

目次

其 一	慈明禪師と翠巖和尚	一
其 二	那須與一の扇の的	八
其 三	某標公の離欲	一六
其 四	オルレアンの少女	二一
其 五	塚原卜傳の無諍三昧	三一
其 六	誠拙和尚の氣概	三七
其 七	久田船長の最後	四三
其 八	二少女の決闘	五〇
其 九	馬夫の誠實	五四

其十	乞丐の氣焔	六七
其十一	烈女美智能	七〇
其十二	愛語の妙力	七八
其十三	阿含經の四婦	八二
其十四	餓鬼と天人	八九
其十五	異體同心の武時夫妻	九三
其十六	嗚呼忠勇なる齊光號	九七
其十七	クリミヤの天使	一〇〇
其十八	英雄の心事	一〇八
其十九	無言の判決と眞正の懺悔	一一二
其二十	カリホルニヤ沖の慘劇	一一七

其二十一	沈勇と客氣	一二三
其二十二	高松城主清水宗治	一二六
其二十三	白隱禪師の慈悲	一三六
其二十四	曾呂利新左衛門の諷諫	一四二
其二十五	大久保彦左衛門の不諂諛	一四六
其二十六	末利夫人の持戒	一五一
其二十七	晉豫讓の孤忠	一五六
其二十八	漢蘇武の持節	一六二
其二十九	少女宿瘤の心操	一六九
其三十	十返舎一九と蜀山人	一七二
其三十一	頼山陽の識見	一七六

四

其三十二	平原君趙勝の英斷	一八六
其三十三	魯仲連の無所得	一九一
其三十四	神贊禪師の證悟	二〇一
其三十五	松平信綱の奇才	二〇六
其三十六	滑稽猿芝居の話	二一〇
其三十七	惠心僧都の母	二一七
其三十八	三井養安の慈善	二二二
其三十九	某公卿の慚愧	二二六
其四十	徳川家康の仁慈	二二九
其四十一	長壽王の忍辱	二三五
其四十二	高塚五郎兵衛の確信	二四四

其四十三	甘酒屋愚水の教訓	二五三
其四十四	館林城の靈狐	二五七
其四十五	極悪の樵夫	二六二
其四十六	積善の黄門	二六九
其四十七	窮龜と病雀	二七一
其四十八	瞋恚の害と忍辱の徳	二七六
其四十九	少欲と知足	二七八
其五十	自己の眼睛	二八六
其五十一	僧侶と少女	二九〇
其五十二	師婦操子	二九六
其五十三	卞和の泣玉	三一二

其五十四	天徳寺の同情	三二六
其五十五	佐々木高綱の非道	三二〇
其五十六	三種の不安語	三二九
其五十七	蘭相如の方便	三三四
其五十八	公私の別	三四三
其五十九	本間孫四郎の馬術	三四七
其六十	司城子罕の寶	三五一
其六十一	墳墓の土	三五四
其六十二	下僕直助の誠忠	三五七
其六十三	程文矩の妻	三七二
其六十四	史魚の屍諫	三七五

其六十五	杉田壹岐の死諫	三七八
其六十六	因果の車	三八三
其六十七	徳川家康と本多忠勝	三八六
其六十八	程嬰と許臼	三九〇
其六十九	唯心の所造	三九四
其七十	安宅關の辨慶	三九七
其七十一	クリストとペートル	四〇五
其七十二	兆殿司の一心	四〇九
其七十三	仁徳帝の禮讓	四一四
其七十四	悪言是功德	四一九
其七十五	強慾なる酒賣婆	四二三

其七十六 法師と盜賊……………四二六

其七十 伊達忠宗の短慮……………四三〇

其七十八 草野の二王子……………四三五

其七十九 喧嘩押への御符……………四四二

其八十 風流なる夫婦……………四四五

其八十一 薩摩守忠度の詠歌……………四四九

其八十二 一休和尚の蟲干……………四五五

其八十三 般若多羅尊者の讀經……………四五八

其八十四 光明皇后の發願……………四六一

其八十五 益者三友……………四六六

其八十六 怪物と狂人……………四七〇

其八十七 同事行の功德……………四七七

其八十八 僧某の不殺生戒……………四八〇

其八十九 念彼觀音力……………四八三

其九十 虱と蛇の念力……………四八七

其九十一 滑稽慾の間違……………四九一

其九十二 身子の檀波羅密……………四九四

其九十三 高野山懺悔物語……………四九六

其九十四 亡夫墓前の服毒……………五〇四

其九十五 孝女の赤誠……………五〇九

其九十六 默然心受……………五一九

其九十七 乞食月僊の無爲欲……………五二四

布教資料 因縁百話



慈明禪師と翠巖和尚

吉村雄鳳編

昔南嶽下十一世の法孫に、慈明禪師と云ふ名僧知識があつて、其門下有翠巖と云ふ和尚が居た。或時慈明禪師は翠巖の所悟を試んとし、石して如何なるか是れ佛法の大意」と問はれた、佛法とは何う云ふものかとの質問である、すると翠巖和尚は「雲の嶺上に生ずるなくんば月の波心に落つるあり」と答へた、此意味は、雲が蔽ひ隠さ

其九十八 オビダ一の旅行……………五二九

其九十九 孟子と顔叔……………五三九

其百 驢馬と雲水僧……………五四四

目次終

なかつたならば、月の光りは明皎々と水に映つると云ふ事であつて
 茲に雲と云ふたのは無明煩惱を指し、月は常住佛性に喩えたもの
 である、即ち無明煩惱の雲が、常住佛性の月を隠さなければ、其
 光りは千波萬波の水に映つて、得も云はれぬ光景を呈するのである
 が、凡夫衆生の猿聞しさには、煩惱の雲深くして佛性の月輝くに由
 なく、折角具へし常住の徳もあはれ無明の裡に埋もれて居るのであ
 る、其れゆゑ今其無明煩惱を除いて、常住佛性の明徳を現はすの
 が、佛法修行者の目的であり又佛教其もの、大意であるとの精神で
 ある、洵に此答話は簡明に能く出来て居るので、實は翠巖自身も、
 咄嗟の間の答案としては中々能く出来た、多分禪師も贊めて下さる

だらうと、心待ちに待つて居ると、禪師は眼を瞋らし聲荒らげて頭
 白く齒豁にして猶者個の見解をなす、如何か生死を脱離せん」と怒
 鳴りつけた、白髮頭の亂杭齒、好い年齢をしてけつかつて、まだ其
 様なつまらぬ事を云ふて居るのか、其んな状態で何時生死を解脱す
 るのか、馬鹿者奴が……と云はれたのだ、翠巖和尚案に相違して、
 呆氣に取られて二の句が續かぬのみならず、これが小供の叱られた
 のならば、左程見苦くもなけれど、禪師の云はるゝ如く頭白く齒豁
 な老爺が、頭下しに怒鳴られたのだから、餘所の見る目も氣の毒で
 あるが、第一本人の口惜しさは大抵では無い、涕淚悲泣稍暫らしくは
 垂れた頭も上らなんだが、程經て最も切なげに「如何なるか是れ佛

慈明禪師と翠巖和尚

法の大意と問返した、其意は、私の了簡では最前申上たより外に、お答への致しやうも御座いませんが、併し、あれでは悪いとお仰るならば、何と致方も御座いませんから、今改めて私の方からお尋ね致すが、全體佛法と云ふものは何んなもので御座りませうか、と云ふ積りである、すると慈明禪師は「雲の嶺上に生ずるなくんば月の波心に落つるあり」と答へられた、何だ、其れなら最前私が云ふた通りぢやありませんか、其れでは悪いとお仰るから今改めて聞いたんだ、頭が白いの齒が亂杭だのと、好い加減に人を馬鹿にして置きながら、其れやア全體何うした譯です、と、普通の者なら云ひたくなる處だが、流石は翠巖和尚、言下は大悟す」とある、

慈明禪師が「雲の嶺上に生ずるなくんば月の波心に落つるあり」と仰せられた其言葉の、終るか終らぬ内に大悟徹底したのである、成程」と佛法が悟つたのであつた、が併し、翠巖和尚には悟つても、吾々には一寸悟り憎いから、決して早呑込みをしてはならぬ、彼の擊劔の稽古をするのを見て居ると、師匠の使ふ竹刀は百發百中、巧みに何處へでも打込まれるが、門弟の持つ竹刀は中々當らない、「お面」と打込んで空を打つ、「お胴」と來ても空を拂ふ、決して意の如くに當るものでない、其處で門弟は「此れやア竹刀が悪いのだらう」と思つて、師匠の竹刀と交換して貰つて立揚る、此度こそは……と思ふけれど、矢張り駄目だ、甘く當らない、自分が見

慈明禪師と翠巖和尚

捨てた竹刀でも師匠が持てば妙に當る、其れヤ其筈である、テンで腕が違ふのだから、竹刀に變りは無いが腕に天地の相違があるから止むを得ない。今翠巖和尚が「雲の嶺上に生ずるなくんば月の波心に落つるあり」と打込んだ竹刀も、竹刀に不足は無けれど翠巖の用ゐる方が悪い、其處で慈明禪師が「其れでは好けない、斯う云ふ工合に使ふのだ」と云ふ心持で、翠巖の竹刀を取つて使つて見せたのが、禪師の「雲の嶺上に生ずるなくんば月の波心に落つるあり」と云ふお答話なのである、翠巖和尚は流石に其處の意味を辨へて居たから、言下に大悟する事が出来たのである、其れを今我々が無意味に真似をしたからと云つても、何の役に立つ譯のものでも無い、

彼の有名な美人の西施が、何か心配事があつて顔を盛めて居たのを、或る一人の醜婦が見て、「女の顔を盛めて居るのは又優に風情の有るものだ」と考へて、自分も人から愛されやうと思ひ、わざと心配氣に鬱ぎ込んで居た、すると、之を眺めた人々は何れも皆腰を抜かさなばかりに驚いて、逃げ去つたと云ふ事であるが、其れヤ其筈、只さへ恐しい形相の醜婦が、殊更顔を盛めた處などは、何の事は無い人三化七だもの、人が逃げ出すのも無理はない、斯様な譯であるから、我等お互も徒らに鸚鵡の人真似をせず、能く〜實參實究して、箸の上げ下しにまでも、佛法の妙味が現はれるやうにならねばならぬ。

其二 那須與一の扇的

雜阿含經に「信心を種子と爲し、苦行を時雨と爲し、智慧を犁耜と爲し、慚愧心を轆と爲し、正念もて守護るは、これ即ち善く御するものなり」とあるが、眞や天を震はし地を動かし、鬼神をも感ぜしむる程の大威力は、固より信心の種子に因らねばならぬ。今を距る七百餘年前、源平兩氏が互に鎬を削つて權勢を争ふた時のこと、那須與一の扇的と云ふ名高い話がある、落合小中村兩先生の著書には斯う云ふ風に出て居る、壽永三年の二月、平宗盛が安徳天皇を奉じて讃岐の屋島に移つた、すると、其翌年源義經は追

那須與一の扇的

討の院宣を蒙つて、數多の軍勢を率ゐて之を襲ひ、火を三方に放つて一方より攻め立てた、折しも西風いと烈しくて、風は焔を煽り焔は風を發し、炎焔天に漲ると云ふ有様で、げに此世からなる焦熱地獄、阿鼻叫喚もかくやと思ふばかり、流石に天皇を始め奉り、一門徒黨の人々も我を忘れ迷路を失ひ、何れも先を争ふて舟に飛び乗り、沖を遙かに引揚げたのであつた、斯くて陸には源氏、海には平家、兩陣相對して激しく矢弓を交えたが、敵も味方も勞れに勞れ、日も早や西に入合の鐘撞く頃に、兩軍俱に退いてホツと一ト息、楯の此方に冥加の胸を撫で卸した、時に彼方の沖より美しく飾られたる船一艘、渚に向つて漕ぎ寄せる體に、人々何事やらんと見てあれ

ば、其船の中に柳の五重に紅の袴着たる女房一人立ち現はれ、日を出したる紅の扇を竿に挿んで船の艦に立て、之を射よとの手振を示して源氏の方を招く様子である、其心は云ふまでも無く、若し源氏方にて誰か此扇を射留める者があつたらば戦の勝利は敵に歸すべく萬一射損じたらば味方の大捷疑ひなしとの辻占に備へられたるものである、紅の扇と云ふは故高倉院が嚴島詣の砌り、三十本切り立てて明神に御奉納あらせられたる其扇の一であつて、又之を押立てたる女房は誰あらう建禮門院の立后の時、千人の美女の中より抜摘せられたる女房で、玉蟲前と名け又舞の前とも稱せられたる、芳紀正に十九歳の美人であつた、源氏の軍兵何れも其氣色の艶やかさ

に先づ目を驚かし、中には度肝を抜れた者さへあつた程である、義經取敢えず畠山重忠を召して、「御身も見らるゝ如く彼處に扇打ち立てたるは、我軍兵に射よとの事なるべし、御身之を試みては如何に」と仰せられたれば、重忠畏まりて「我君の御仰せ、家の面目此身の名譽、決して兎や角申すべきにあらねど、併し源家に取ての由々敷大事、敵の前での晴藝に御座れば、苟ならぬ大事の場所、然るに拙者此程より馬に振られて心地悪しく、不例の身を以て事仕損じなば、某甲のみか源家一門、末代までの耻辱に御座れば、何卒今回限り餘人に仰せ下されたし」と言上に及んだので、義經然らば「誰そある」との玉へば、「下野國の住人那須太郎助宗が子息、十郎兄弟こそ然る

べう存る」との事に、「さらば十郎！」とて召出された、義經欣然として「イヤ何に十郎！彼の扇射落し見やれ」「ハ、ア冥加に餘りし身の面目、勿體なしとも忝なしとも、申上やうは御座らねども、先日一の谷の逆落しに、馬弱くして弓手の臂を沙に附かせ、其傷未だ癒え申さねば、何卒拙者が弟なる與一宗高に仰せ下さるやう、偏へに願ひ奉る」と申上たので、「さらば與一！」とて召し玉ふた、ハツと對えて御前に罷出でたる與一宗高、本年取つて十七歳、紺村濃の直垂に緋威の鎧、鷹角反の兜を猪首になし、二十四差したる中黒の矢負、滋藤の弓に赤銅造の太刀を帯びて、恭しく平服してあつたれば、義經「汝は與一よナ、好くぞ參つた、早く彼の扇射落し

參れ、源平環視の晴所作なるぞ、心臆して不覺を取るな」といと嚴かに仰せありし故、宗高も其責任のあまりに重きを感じてか、何か仔細申上んとせし折柄、伊勢三郎義盛等與一向ひ、「兎や角申す程に、日も暮れ果つべし、兄十郎殿御身を御薦め申せし上からは、何しに仔細のあるべきや、疾く々々急ぎ候へ、海上今にも闇く相成りなば其れこそ由々しき大事なれ、いざ與一殿、宗高殿」と急ぎ立てたので、今はと宗高心を定め、「然らば仕らん」とて兜拔ぎ捨て採烏帽子に薄紅梅の鉢巻して、馬に跨り静々と波間を指して乗入れた、が、今此大任を一身に引受けし宗高が、心の内はそも如何、遙かに沖を見渡せば安徳天皇を始め奉り、御母建禮門院、平家の軍將屋島大臣、

那須與一の扇的

さては一門の面々數百艘の兵船を泛べて、今此晴の藝をば見物なし
 後ろは源氏の大将軍を始め、土肥、島山など一騎當千の武者、轡
 を并べ片唾を呑んで注意の目を見張る、嗚呼此時の宗高の心の内は
 如何ならん、搗て加へて海中の習ひ、馬は逸りに逸つて手綱の利目
 もなく、船は揺り上げ揺下げられて扇の位置定まらず、西風益々荒
 んで何處を射つべしとも覺えず、嗚呼此時の宗高の心の内は如何な
 らん、宗高今は運の極みと覺悟して、眼を閉ぢ心を静め、南無八幡
 大菩薩、總日本國內八百萬の神々、わけて日光權現宇都宮、那須の
 湯泉大明神、仰ぎ願くは彼の扇を射させ玉へ、若し某甲射損じたら
 んには即座に弓引折りて馬上に切腹するの外なし、哀れ今一たび本

國に返させ玉はんとならば、此矢ゆめく外させ給ふな、南無弓矢
 八幡大菩薩と心の内に祈念して、ハツと眼を開けばこは不思議！
 風稍々風いで船も馬も静つたので、宗高雀躍しつゝ、ハ、ア、忝なし
 と弓を満月に引絞り、此機を外さずヒヨウと放てば、屋島の浦曲に
 矢響して、其矢は飛んで扇の金目を美事に射切つた、射切られたる
 扇は空を飛んで木の葉の如く、紅の色は夕日に輝いて波間に漂ふ、
 其光景の床しさ面白さ、敵も味方も我を忘れ、舷を打つ音、楯を叩
 く音、歡聲之れに和して百雷の一時に落ちたるが如くであつた、嗚
 呼此時の宗高が心の内は如何にあつたか、かくて宗高が苦行と智慧
 と、慚愧心と而して正念とは、渠の信心を種子として能く其功を奏

那須與一の扇の的

したのである。

其三 某標公の離欲

昔標装を業とする某甲と云ふ、ごくく性質の淡泊な者があつた、日々外に出で、は業に従ひ、夜に入つては家に歸るを常として居たところが、其標公が毎夜家に歸るや先づ一室の疊を揚げて中を覗き、「在るか、ウン在るナ」と恰も人と應對をするやうな態度で、獨言を云ふのが癖であつた、朝に出づる時も矢張り其様である、家に召使つて居る一人の奴僕が、甚だ之を怪んで、何でも奥座敷の疊の下に何か不思議があるに違ひない、左も無くばアンなに檀那が氣にして、

某標公の離欲

朝晩疊を揚げては獨り妙な合點をする筈が無い、何時にか一度檀那の留守に、彼の疊の下を改めて、篤と奇怪の性體を見届けて呉れやうと待ち構えて居た、すると、折能く主人の不在中に自身の閑暇も有つたから、ソツと座敷に這入り込で、怖るく不思議の疊を揚げて見た、ところが驚くべし個は如何に、其疊の下には光彩燦爛たる黄金の小判が幾枚となく列べてあつた、奴僕は驚くまいか吃驚せまいか、腰も抜けんばかりに仰天したが、「テも扱ても是れだく、檀那が日頃氣にして少しも忘れる暇の無い怪物は、併しまア彼の様な萬事に淡泊な人が、何うしてお金など溜める氣になつたらう、去りながら斯程大事にして居る此金を、密つと隠してゞも置いたなら

と、如何にも其喜びの色が満面に溢れての話である故、奴僕は大に其悪戯を愧ぢて、「決して悪氣で致したものではありませんが、檀那が餘り大事になさるのを見て、ホンの戯れに私が隠しましたのです、何うぞ御了簡下されませ」と、残らず小判を出して只管詫び入つた、すると標公は思はず眉を蹙めて「何だ！折角安心した甲斐もなく、復出て来たのか、汝が盗んで置いて呉れば、コンな好い事は無いのに、困つたなア」と嘆息したと云ふ事である、佛が四十二章經に「離欲寂靜是れ最も勝れたりと爲す」と説かせられたのも、又遺教經に「多欲の人は利を求むる事多きが故に、苦惱もまた多し、少欲の人は無求無欲なれば則ちこの患なし」とお説きなされたのも皆この事である。

其四 オルレアンの少女

事である。

今より五百年餘り以前佛蘭西に於て、世界に名高き「百年戦争」と云ふのがあつた、此戦争の起りは英王エドワード三世が、其母が佛王ヒリップ四世の子であつた所から、自身が佛國の王位に即て英佛二ヶ國を統一しやうと謀つたのが本で、千三百三十九年より千四百五十二年まで百年餘りも繼續した戦争であるから、斯う云ふ名が附いたのであるが、頃は佛蘭西王チャールス七世の御代であつた、打續く永の戦争には又種々なる事情も纏つて、國內は麻の如くに亂れ、

人民は唯の一日たりとも安堵の暇はなく、一國の運命は恰も風前の
燈火のやうであつた時、其危い國運を纖弱い一少女の力を以て挽回
したと云ふ、怖ろしい様な珍らしい話がある。其少女と云ふのはド
ムレシイと云ふ片田舎の農家に生れたジョアン、ダークと云ふ娘で

ある、此女兒は大砲の音や馬の蹄の響の間で生れて、切つ削つの話
の中に成人したのであるから、幼稚心の裡にも己が生れた佛蘭西國
の不幸な事や、國王チャールス七世が即位の儀式さへも行はれない
で、明暮れ國患に悩まされつゝある薄命な事など、小さな胸の裡に
思ひ煩はぬ日としては無つたのである、ところが不思議やジョアン、
ダークが十四五歳のときであつた、木影床しき夏の日、我家の庭園

に唯一人逍遙ふて、見るともなく青空を眺めて居ると、不意にピカ
くと異様な輝きが天の一方に漏れたので、ジョアン、ダークハッ
と思ふて避易ぐ途端、光輝の中より聲あつて、「ジョアンよ和女は俠
氣な兒ぢや、必ず信心を怠つてはならぬぞ」ジョアンは思はず戰慄
ひして驚いたが、ア、ア日頃神経を惱めて居るゆゑ、かゝる氣迷ひ
が起つたのだらうと、其日は其れで濟んだのであつたが、暫らく經
てから又或日の事、同じ光輝を拜んで、而も今度は其光輝の中に何
とも云ひ様の無い、神々しく貴い御姿が現はれて「ジョアンよ和女
は何故早く佛蘭西の王様をお救ひ申さぬか」と責付けられたので、
ジョアンはあまりの怖ろしさは、矢庭に其處へひれ伏して「ア、神

様ッ、何を仰しやいます、妾の様な見る影も無い百姓娘が、なんで王様をお救ひ申すなんて……ソ、ソな事が出来たもので御座いますか」と聲を震はせて申上ると、「イヤ神は必ず和女に附添ふて、屹度助けて玉はる故、ゆめく疑を懐くでは無い」と言ひ放て、忽ち姿は消え失せたので、ジョアンは餘りの不思議さに、暫しは立ちも得あがらなんだが、かゝる神託を蒙る事が前後四年に及んだので、不圖古人が云ひ遣した豫言を思ひ浮べた、并は昔メルリンと云ふ聖賢があつて、後世佛蘭西に一神嬢が出て國家の大難を掃ふと云ふのであつたが、ジョアンは今神の託宣に依つて、メルリンの所謂神嬢とは即ち我が事であると自覺した、而して我は佛蘭西と佛蘭西の王様

とを救はんが爲に、此世に生れて來たのだと深く自信したのであつた、で、此れ迄は美しい花の如き少女であつたのが、此自覺と自信力とに依て忽ち硬い鐵の如き英雄と化したのである、「信は諸の善根を清淨明利ならしむ、信の力は堅固なり、懐る可らず、信は永く一切の悪を除滅す(六十華嚴經)」と、げに信仰の力は怖ろしい程偉大なるものではあるまいか、其處でジョアンは涙を以て止むる父の手を振り切り、ポエールルの町に住んで居る叔父の許へ駆け付け、己が志望を告げた所が、叔父は頗る感動して、然らば一臂の力を添へて遣らうと自ら土地の知事を訪れて、事の顛末を訴へたのであるけれども最初は知事も一笑に附して信じて呉れなかつたが、終には

ジョアンの熱烈なる自信力に動かされて、數名の護衛兵を附けて國王の行在所へ送つた、其道中すから數多の盜賊にも出逢ひ、又敵兵に襲はれた事も數々あつたが、鐵石の如くに凝り固まつた信仰は懷れもせず、火の如くに炎え揚つた一心は消えも失せず、其度毎に従卒を勵まして「決して恐れるには及ばない、我々は神の指さす道を辿つて、只管國家の爲に身命を擲つたのだから」と云ふて居た、かゝる信念を自己の甲冑として、幾多の辛苦艱難を経た揚句、無事に行在所に着いて國王にお目通りを願ひ、自己の使命を臆面もなく訴へて「何うぞ妾に何程かの兵隊をお貸し下さいませ、さすれば妾は立ろにオルレアン城の重圍を解て、必ず陛下をリームの御寺へ御供申

ます、此事は間違ひなく成功するとの神様のお告で御座います」と奏上した、オルレアンは佛王の居城で、リームは佛國歴代の帝王が即位式を行はせらるゝ土地であるから、今ジョアンが云ふたオルレアンの居城を恢復して、陛下をリーム府にお供申す事は、佛國の威嚴上實に重大なる必要である、陛下を始め群臣一同アツとばかりに驚いたが、ジョアンの云ふ事が不思議な中にも亦何處となく神々しい所のあるのと、今一つは目下佛國の運命が實に危急存亡の場合に陥つて居るので、彼是れ質疑を挿んで居る餘地が無いので、輿論の結果終に大業恢復の將印を授けたのである、ジョアンダーク天にも登る心地して早速陛下を辭しオルレアンに向て出陣した、而して

敵も味方も神と尊び魔術者と怖る、間に豫定の大捷を博し、全く敵軍を潰走せしめオルレアンを恢復して國王の許に凱旋した、凱旋したるジョアンは負傷せる腕を以て國王の膝に取縋り、涙ながらに申上た、「サア早くリームへ御越し下さいませ、御約束通りジョアンが御供申上ます、一刻も御躊躇召さる場合では御座いません」陛下も意外なるジョアンの成功に驚かされたる矢先き故、速に此勸めを用ゐられた、而してリームの大寺院に於て嚴かなる即位の大禮を擧げさせられ、茲に初て名實相伴ふ所の眞正の佛蘭西國王とならる、事が出来たのである、かくてジョアンの志望は理想通りに達せられたのであるから、此際斷然骸骨を賜はつて田園に餘生を送らうとした

のであるけれども、王は此女傑に暇を許さなかつた、而して其一族を擧げて悉く貴族に列し、大に其功勞を賞せられた、で、ジョアンも亦王の殊遇に感激して爾後屢々策を獻じて補佐の任に當つた、けれども、高さ樹ほど風に惱まざる、道理で、終には左右奸臣共の嫉む所となつて、萬事意の如くに行ふ事が出来ず、翌年には更に全佛國を回復しやうと謀つて、破竹の勢を震つて出征したが、大事の瀬戸際に後援を得る事が出来ないで、あはれ一敗地に塗れ、退いて都に歸れば都門堅く閉ぢて開かず、進退茲に谷つて不幸遂に敵の毒手に捕へられたのである、嗚呼昨日までも今日までも、手に軍旗を翳して千兵の眞先に立ち、神の指圖を受けて身を國患に委ねたるジ

オルレアンの少女

ヨアンは、哀れ猫に狙はれたる鼠の如く、悄然と法廷に立て暴慢なる敵の裁判を聴かねばならぬ運命に陥つたのである、裁判官は高き席より横柄に「ジヨアン貴様は自ら神の使と詐り、託宣を受けしと欺いて愚民を籠絡し、驕慢不遜の行爲を敢てせしが、モウ斯うなつては叶うまい、尙其れでも我身を幸福と思ふか何うぢや」ジヨアンは心靜かに「ハイ妾の今の身の上、果して幸福であるか何うかは妾には判りませんが、若し幸福であるならば神様は此幸福を何時までも、妾に授けて置いて下さるに違ひなく、又今の身が不幸であるならば、早く其不幸を除いて、速に幸福を與へて遣らうと思召さるゝに相違ありません」と答へた、前は爪牙鋭き悪魔の敵に對し、後

には冷酷極まれる恩を怨なる味方を控へて、身風前の燈火にも似たらん刹那、尙且つ天を恨みず人をも恨まずして、かゝる信仰堅き言語を吐くに至ては、實に鬼神を泣かし神佛をも感動せしむるの外はないのである、かくて千四百三十一年五月三十日、ルーアンと云へる町外れの刑場に於て、残酷なる火刑の執行を受けたが、黒き烟の中の紅い焰の間から「天の神様ッ」と響いた一聲があはれ此世の名残であつた。(婦人壯烈譚参考)

其五 塚原卜傳の無諍三昧

塚原卜傳は名を高幹と云つて、卜部覺賢の次子であつたが、後ち塚

塚原卜傳の無諍三昧

原土佐守の養嗣子となつた所から、終に其姓を冒す事になつた、武藝一世に秀で、將軍足利義輝の師となつた事は能く人の知る所である、ト傳諸國遍歴の砌り江州坂本邊より船に乗て、矢橋の浦へ渡らんとした時、乗合の客人の中に年齢四十歳ばかりの筋骨逞しき男があつて、頻りに劍道の自慢をして人々を翻弄して居る、ト傳は暫し狸寐入をして聽いて居たが、あまりの傍若無人さに片腹痛く思はれて、旅行の徒然、時に取ての慰みとムックと起き上り、彼の男に向つて、「イヤ貴殿の御名論、實に感服仕つた、併し御説ではあるが我々も若年の頃より随分修行は仕つたなれど、根が不器用もの、悲しさに、其劍道が一向役に立ち申さぬ、されど、修行のお蔭を以

て只今にては人に勝たんとは存じ申さぬ、唯だく負けぬ様との工夫ばかり仕つて御座る」と云はれた所が、彼の男カラ「と高笑ひをして「然らば貴殿の劍道は何流で御座るか」との尋ねに、「拙者の流儀は今申す通り人に負けぬを專一となす故、之を無手勝流と申すので御座る」無手勝流ならば腰に帯んだる兩刀は何の爲に使用召さる？」是れは以心傳心の二刀と申て、我見我慢の己が妄念を斷つべき爲の用心で御座つて、決して敵を討ち相手を苦めん爲の料には御座らぬ」然らば拙者此處に於て、貴殿と立合ひ申さんに、美事貴殿は手を用ゐずしてお勝ち召さるゝか」何でも無いこと」確と左様か」御念に及ばぬ」サア大變だ、船客一同何うなる事かと手に汗を

握り、片唾を呑んで控て居る、彼の男は烈火の如く怒りの髪逆立て船奴に向て「ゴリヤ、船奴！早く此船岸に着けよ、陸に上つて勝負を決せん、愚圖く致すと了簡相成ぬぞッ」と大層な権幕、ト傳先生氣の毒に思はれてか、「ヤア船奴衆！乗合の方々！思ひ設けぬ立合ひなれど、身に振掛つた今の難題、了簡して下され、併し陸に上ての勝負は往來の人の迷惑にもならう、幸ひ彼處に見ゆる離島、見るから床しい唐崎の、松の根方で一ト勝負、無手勝流の極意をば、見參に入れ申さう、急ぎの旅の御人も御座らうが、袖振り合ふも他生の縁、躓く石も何とやら、假我せぬ様に此船で、緩くり見物して下され」とて、頻りに船を漕がせたが、船が彼の島に着くと等しく以

前の男はヒラリと飛び躓え、岸に上つて足をは踏み直し、スラリ太刀を引抜いて、「サア早く御越しあれ、卑怯未練に何に愚圖く、早くくく」と罵りながら二王立ちに身構へた、ト傳落着き拂つて、「イヤお騒ぎ召るな、拙者の流儀は意を落附け氣を躋の下に收めざれば決して立合はぬ習で御座る、暫らくお待ちあれ、お騒ぎ召るな」云ひつゝ、立上つて裳を取り、腰に帯んだる兩刀を抜いて船頭に預け、水掉を押立て「ヤオラ岸に跳ね上るかと思ひの外、押立てた水掉にグツと力を入れて船を後に踏張つた、而して船は岸を離れ艦はト傳の手に握られた、一同呆氣に取られて開いた口が閉らず、彼の男は地段駄踏んで口惜がり、「ヤア卑怯なり未練なり、何故上つて勝負を致

塚原ト傳の無諍三昧

さぬ？武士にも似合ぬ卑怯未練！其船歸せツ戻さぬかつ」と猛り立つれば卜傳は「何しに其れへ参らうや、若し残念に思されなば、水を渡つて向の岸へお越しあれ、拙者の一流無手勝とは此事なり、御會得召されしか穴賢く」と扇を揚げて笑ひ興じつ、山田村と云ふへ上陸し、野路を辿つて何處ともなく去られたと云ふ事である。大薩遮尼乾子經に「如來の智慧の日、無漏の摩尼珠は餘處より生ぜず、禪定海中より出づ、是故に諸の佛子、佛の大智寶を求めんには散亂の心を除き禪波羅密を念ずべし」とあるが、蓋し卜傳の如きは其意を得た人と云ふべきであらう。

其六

誠拙和尚の氣概

昔鎌倉五山の一たる圓覺寺の樓門が頽破に及んだので、其修繕費を諸國に勸進した事がある、其時江戸深川の豪商で白木屋某と云ふ篤信家が、百兩と云ふ大金を携へて態々鎌倉まで鞋掛けで寄附に往つた、而して寺へ着いて早速其旨を申入れた處が、鳥渡其時勝手の爐端でお粥をクツク煮て居た老僧が、格別禮も云はずに其百兩を受取て、お茶一つ呑めとも云はないので、白木屋の老爺も聊か不平の體、江戸から態々鎌倉三界まで百兩と云ふ大金を寄附に來たのに、御苦勞であつたとも、上つて一服して行けとも云ふて呉れぬとは、

あまりと云へば不愛想千萬、つひウツカリと「一言の御禮位は云ふて下さつても満更罰も當りなすまい」とやつた、すると、老僧は赫と眼を瞋らし、イキナリ鍋蓋を取つて擲げつけたから堪らない、ソリヤ其筈、此老僧と云ふは圓覺寺の時の住持で、名を誠拙と云つた知識で、まだ青涕二本垂して居た頃、伊豫の宇和島十三萬石の城主伊達公の頭をボカリ擲つて、「此野郎」と罵つた豪の物である、序手ゆゑ話すが其れは斯うであつた、宇和島の佛海寺と云ふは伊達公の菩提所で、時々殿様が參詣にやつて來られる、或時藩主伊達公が住持の靈印和尚を訪れて四方山のお物語があつた時、鳥渡この寺に貰はれて居た腕白盛りの誠拙に、何様が肩を叩けと命ぜられた、實は

誠拙小僧も嫌ではあつたらうが、相手が相手だから我慢をしてボカ叩いて居たものと見える、すると殿様も如才が無い、シツカリ叩かさうと思つてか、「予は此度江戸表へ出府致すに因つて、歸りに其方に好き法衣でも土産に取らさう、其代りシツカリ肩を打て呉れ」と云はれたので、小僧大喜び「殿様有難う御座います、中々此殿様話せらア」と一生懸命で叩いた、其日は其れで濟んで、伊達公彌々御出府になり、再び宇和島へ還へられ、復もや佛海寺へ御參詣になつて、住持とお話の序、又誠拙小僧に肩を命ぜられた、今度は小僧大喜びで待つて居ましたとばかりに飛び出して、二ツ三ツボカ叩打ちながら「お殿様モウ江戸からお還りになりましたのですか

大層お早いので御座いますねえ」「ウン、コリヤ、小僧モソツと静かに叩け、其れでは餘り強過ぎるワ」小僧は法衣を貰うと思つて夢中だ、が、一向殿様には法衣のユの字も仰しやら無い、誠拙待遠しさに「お殿様、江戸チウ處は何でもある、好い處でせうね」「ウン江戸は八百八町と云つてな、其れは、廣い好い處ぢや」「へエイさうですか、其れぢやア何んな物でもあるでせうね」「あるとも、何でもある、小僧なんぞ連れて往つたら、嘸ぞ欲しい物ばかりだらう」殿様調子に乗つて頻りに話込んで居らるゝが中々法衣の話が出ない誠拙大に焦躁しく成て「殿様、先達お約束の法衣は何うなりました」と催促すると、殿様「アツさう、つひ忙しかつたのでスツカリ

忘れて仕舞つた」「ナニツ忘れた、此野郎、武士に似合ぬ二言を吐く奴だ」と今まで肩を打て居た握拳でホカリ殿様の頭をお見舞申た、サア大變、靈印和尚眞青になつて小僧を制し、殿様に兩手を着いて無禮を謝し「お手打ばかりは平に御容赦」と哀願に及んだ、すると伊達公は打笑はれ「イヤナニ此は予が悪かつた、赦して呉れアれ是れ小僧！シタが今此宇和島で、予が頭に鐵拳を喰はする者は此小僧一人ぢや、随分可愛がつて育て、遣はせ、ウン中々見處のある奴ぢや」殿様は頭を擲られて頻りに感服を爲られたが、果して此の小僧が天下の名僧知識となつて圓覺寺へ出たのである、白木屋の老爺もんな和尚に取捕まつたのだから堪らない、今しも鍋蓋取つて擲付け

誠拙和尚の氣概

た誠拙和尚、破鐘のやうな聲を張揚げて「貴様が自身の功德を積むに、己が禮云ふ道理が何處にあるツ、そんな惜しい錢なら一文も入らぬ、サツサと持て還れツ」と怒鳴れたので、白木屋某も呆氣に取られ、ホウ／＼の體で逃げ還つたと云ふ話である、今誠拙和尚の措置も固より極端ではあるが、又施しを行ずる者は優婆塞戒經の「乞ふものに語れ、汝今眞にこれわが功德の因たり、今慳貪の心を遠離するは、皆汝が來り乞ふの因縁によると」との心掛けが有つて欲しいものである、承陽大師のお言葉には「其物の輕さを嫌はず其功の實なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし此生佗生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし此世佗世の善根を兆す、法も財なるべし財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず自らが力を願つなり」とある。

其七 久田船長の最後

布施、持戒、忍辱、精神、禪定、智慧の六つを六度と云ふ度は自らも度り他をも度すの意であつて、其中の布施と云ふのは何事に就ても貪の心を發さず、而かも能く自らの力を願ち與ふるの義であり、持戒は日月星辰四時の運行が其序を亂さざるが如く、能く規律を守つて毫も得手勝手を交へざることに、忍辱は心を潔く高く持つて、驕慢の念に驅られ瞋意の焰に焼かるゝ事なく、克く忍び克く耐えて、

猶且つ愛を捨てざることを恰も我子に對するが如きを云ふのである、
 精進とは戊申詔書の所謂「忠實業に服し勤儉産を治め」て、撓ま
 屈せず勉強するの意、禪定は一切の妄想を打破して、心を猿や馬の
 様に驅け廻り飛び跳ねざる様、チャンと落着き場處に安んずる事を
 云ふので、其禪定の徳から自然に現はれ出で、能く物事を明らか
 に照す所の働きを智慧と名くるのである、茲に紹介せんとする日本
 郵船會社の東海丸船長久田佐助氏が、津輕海峽に於て悲惨なる最後
 を遂げられたる其行動が、如何にも此六度の妙行に能く契て居ると
 感じらるゝのである、當時予は函館要塞の軍人布教を命ぜられて任
 地に在つたので、現に遭難者の一人より委しく實況を聞くことも出

來たのであつた、其大要は斯うである。
 頃は明治三十六年、日露の風雲漸く切迫して、數多の政客は此處彼
 處に外交を論じ、五千萬の民衆は血涌き肉躍つて、賤が伏屋に絲繰
 る老嫗までが、戦争の火蓋は何時切れるかと、待ちに待たる十月二
 十九日、時は午前四時半、函館港を距る十五哩の、矢越の沖と云ふ
 沖合で、露國の商船ブロードス號と、吾郵船會社の東海丸とが衝
 突して、東海丸の船長及び船員二十名と乗客二十二名は、あはれ非
 命の最後を遂げて海底の藻屑と消え去つたのである。此日は前夜來
 一天搔き曇つて墨を流したやう、加之寒風凜烈肌を裂かんばかりの
 寒空で、搗て加へて鷲毛の如き雪は廣い大海に飛んで散亂する有様

見るから物凄（ものすご）い光景（くわうけい）であつたが、前日（ぜんじつ）午後（ごご）十時（じ）に青森港（あおもりかう）を出帆（しゅつぱん）した東海丸（とうかいまる）は此中（このなか）を物（もの）ともせず函館（はこだて）に向（むか）つ進航（しんかう）したのであつたが、翌曉（よぐげう）四時半（じはん）頃（ころ）突然（とつぜん）ドシンと云（い）ふ恐（おそ）ろしき響（ひび）がしたので、「何（なん）だッ」と一同（どう）は起（お）き上（あ）がる間（ま）もなく「衝突（しょうとつ）！」「衝突（しょうとつ）！」の聲（こゑ）は船中（せんちゆう）に鳴（な）り渡（わた）つた、素破大變（すはたいへん）と乗客（じようかく）一同色（どういろ）を失（う）つて、アハヤ甲板（かんばん）に驅（か）け上（あ）がるもあれば、周章（しゆうた）狼狽（ばうたい）いで倒（た）れるもあり、泣（な）く者（もの）叫（さけ）ぶ者（もの）、宛然（まがら）此世（このよ）からなる叫喚（きやうわん）地獄（ぢごく）、海面（かいめん）は眞（しん）の闇（やみ）で唯（ただ）顔（かほ）を打（う）つ吹雪（ふぶき）の音（ね）と激浪怒濤（げきろうどたう）の響（ひび）が聞（き）えるばかり、船（ふね）は再（また）びバリ／＼と凄（すご）く恐（おそ）ろしき音（ね）を立て、約（やく）二三十分（ぶん）の後（のち）、バツと恨（うら）めしげなる白烟（はくえん）を吐（は）きしまゝ見（み）る／＼沈没（ちんぼつ）したのであつた、是（こ）れは露船（ろせん）が東海丸（とうかいまる）の船腹（せんぶく）に丁字形（ていじけい）に衝突（しょうとつ）したので、直（た）ち

に渠（かれ）が船（ふね）を退航（たいかう）せしめたゆゑ、東海丸（とうかいまる）は一層（そうちん）沈没（ちんぼつ）を早（はや）めたと云（い）ふ事（こと）であつた、が、茲（こゝ）に哀（あは）れなる船長（せんちやう）は毫（ごう）も自（じ）己（こ）の一身（しん）を顧（か）みるの暇（いとま）なく勵聲叱咤（れいせいしつた）、數多（あまた）の船員（せんゐん）を督（とく）して乗客（じようかく）の救助（きうじゆ）に力（ちから）を竭（つく）した、而（さう）して四隻（せき）の短艇（たんてい）中（ちゆう）最後（さいご）に下（おろ）された一隻（いっせき）に向（むか）つ「船客（せんかく）は皆（みな）乗移（のりうつ）つたか」と問（と）ひ、「はい」と答（こた）を得（え）、再（また）び「船員（せんゐん）は」と尋（たづ）ね「船員（せんゐん）も」と聞（き）いて大（おほ）に安（あん）心（しん）したるもの、如（ごと）く、直（た）ちに身（み）を挺（てい）して中甲板（ちゆうかんばん）に這（はい）入り、船（ふね）が全（ま）く水中（すいちゆう）に姿（すがた）を没（ぼつ）し、己（おの）が生命（せいめい）が正（ただ）しく絶（た）え果（は）つるまで獨（ひと）り平然（へいぜん）として一（い）意（い）非（ひ）常（じやう）汽笛（きてき）を鳴（な）らして居（ゐ）た、其（その）汽笛（きてき）が夜陰（やいん）を破（やぶ）つて海面（かいめん）に響（ひび）く物凄（ものすご）さ、何（なに）に喩（たと）へんやうも無（な）かつたとの事（こと）、久田船長（ひさだせんちやう）はなぜ最後（さいご）の短艇（たんてい）に乗移（のりうつ）つて其（その）一（い）命（めい）を全（ま）うしなかつたのであるか——船長（せんちやう）の職（しやく）

久田船長の最後

責として斯く迄注意を拂つたならば最早や遺憾はあるまいに、何も海底に沈没し去る外他に運命を有しない船に留つて、非常汽笛を鳴

さんが爲に二つとなき生命を犠牲に供する必要はあるまいと思ふ、ところが其處が久田船長の神佛にも優る難有い心根である、今船客を始め船員一同を短艇に移したとは云へ、若し一たび去つたる露船が返り来て救助し呉れずば、辛うじて本船の沈没から免れたる人々も、澎湃極りなき怒濤の間に於て、再び第二の悲運に接する事は實に見易き道理なれば、第一行き過ぎし露船に危急を告ぐる爲め、二には又己が一心込めて吹き鳴らす汽笛の、沿岸漁村の人々の夢を破つて哀れ木の葉に等しき短艇に露の命を托して、激浪中に漂ふて居

る悲惨なる者を救へかしの最後の悲願に依つて、渠が一命は犠牲に供へられたのであると聞いては、誰か又船長の心事に感激せざる者があらうぞ、嗚呼久田船長は實に六度の行を全うせられたる菩薩であると思ふ、即ち船長の一命は乗客及船員一同に對する無價の布施である、渠の遺憾なき職責の遂行は實に持戒の徳であり、初中後克く其苦痛に打ち勝ちたるは忍辱であつて、又最後の一人となつて職責以上にまでも身心を竭したのは全く大勇猛大精進と云はねばならぬ、而して最後に下し、短艇に安心して平然中甲板に下りたる態度の如きは、實に禪定力の然らしむる所、若其れ最後の悲智に二個の願をかけたるに至ては、唯たゞ其難有さ、勿體なさに感激する

久田船長の最後

外は無いのである。

其八 一少女の決闘

佛説四十二章經に「人をして愚蔽ならしむるものは愛と欲となり」とあり、又「人の愛欲を懐くが爲に道を見ざるは、たとへば澄水を攪せば衆人共にこれに臨むも、其影を見ざるが如し、愛欲交錯すれば心中に濁りを興すが故に道を見ず」とありますが、實に吾人が道を失ふ原因の重なるものは此愛欲であるに違ひない、尤も愛にも欲にも真正のものもあつて、佛菩薩の慈悲に基く愛や欲は固より吾々の學ばねばならぬ所であるけれども、茲に云ふ愛欲は凡夫の迷

情より發つたる愛欲を指すので、其愛欲は雷に道を失ふばかりでなく、甚だしきに至ては刑法の罪人ともなり此世からなる修羅地獄の苦患を嘗めねばならぬ様な事にもなつて、實際恐ろしき果報を招くのである、犯罪の種類には幾通りもあらうが、其原因を尋ねれば皆愛と欲との二つである、縦令習慣的の窃盜犯と雖も其れが習慣になつたまでの事で、矢張り原因は同一である、今を距る七八年前に露西亞の帝都で、花の如き二人の少女が戀愛の爲に決闘をした事がある、其れは亞米利加流の決闘と云ふので、今決闘せんとする二人の者が抽籤に依つて死を定むるのである。事の起りは最初一人の少女が同國貴族の一青年に戀慕して、互に親

密の間柄となつて終には其青年も少女に戀慕するに至つたのである
 然るに一日少女は己が親友なる某少女を伴ふて其青年の許を訪づれ
 たところが、端なくも青年の心は變じて後の少女を慕ひ、其少女も
 亦青年を戀ふるに至つた、其處で後の少女は親しきまゝに己が意中
 を打明けて前の少女に物語つた、勿論前の少女が其青年に關係せる
 事は後の少女は夢にも知らぬからである、併しながら前の少女は忽
 ちにして嫉妬を起し、瞋意の炎を焰して終に決闘を申込んだ、後の
 少女も餘儀なく之に應じた、今や兩女は各拳銃を手にして一室に
 入り、堅く戸を閉ぢて籤を抽いた所が、最初青年に戀慕した少女が
 後の少女を射撃することゝなつた、其處で後の少女は平氣に死を待

つ覺悟で前の少女に向て立つた、前の少女は拳銃の口を其少女に向
 けて今しも發射せんとする一刹那、如何なる衝動を受けてか、突然
 銃口を轉じて己が胸部に向けて射撃し、立ろに其場に絶命したので
 ある、之を見たる後の少女も亦何と感じてか、直に銃を取つて己れ
 も俱に自殺せんと企てたが、身體戰慄して急所を射る事が出来な
 つた、して僅かに輕傷を負ふたばかりで友の遺骸の上に倒れ伏した
 が、物音を聞いて人々駆け寄つて應急の手當を施したので、此少女
 は幸ひ一命を失ふに至らずして濟んだとの事であつたが、其口で蜥
 蜴啖ふか郭公で、艶麗花の如き美人も時に恐ろしき殺人の大罪を犯
 して、絞首臺上朝の露と消ゆる事もあれば、雨に惱める海棠のそよ

吹く風にも堪えがたげなる少女が、人知れず不正の行爲を敢てして冷かなる囹圄の身となる事もある、老若男女俱に慎むべきは實に愛欲である。

其九 馬夫の誠實

熊澤蕃山は字を了介、各を伯繼と云ふた人であるが、蕃山十六歳の時京都の所司代板倉重正の薦めに依て、備前岡山の池田光政侯に仕へ、二十歳の時まで忠勤を勵んで居たが、不圖謂ふには何時までも斯うして殿に事へて居ては、中々勤め繁しくて自身の修行と云ふものは一向に出来ない、折角武士と生れて此儘に朽ち果つるは残念至

極、濟まぬ事ながら一旦暇を頂戴して、今一ト奮發するに如くは無いと、遂に岡山侯に暇を取つて江州桐原の草深い田舎に引籠り、一生懸命文武兩道に身を窶して居たが、或時又考ふるに、斯く獨學にて事を決するは至て危嶮千萬である、寧ろ京に赴いて好き師に事ふるが此身の爲なるべしとて、一日桐原を出立して京に上り、日々京洛中を駆け廻つて師を求めたのである、去りながら不幸にも廣い京都に蕃山が師と頼むべき人物を見出す事が出来なかつた、蕃山は大に失望しながらも餘儀なく都を立ち出で、心ろ快々と再び江州へ歸へる道すがら、或晩一の旅宿に投じた、而して怪げなる旅窓の下に渠は身の振方を案じ煩ふたのである、さなきだに旅の徒然なるに搗

馬夫の誠實

て、加へて今の身の屈托、ア、誰か好き話相手が無きかと、思ふ彼方の一室には、同じ獨りの旅の町人、矢張り相手欲しさの徒然に、互の心ろが通ふたものか、廊下で一寸一目見たのが縁となり、二口三口言葉を交す内、雙方の心も打解けて、「では今夜は緩くり話さう」と、終に兩人が膝を交え、四方山の世間話に憂鬱を晴したが、最後に町人が「時に先生！今一つ是非貴殿に聞いて頂きたい話がある」と一ト膝乗り出して「其れと云ふのは外では御座いせんが、私か或時主人の大枚二百兩と云ふお金を持ちまして、草津邊から馬を雇ふて道中しましたが、何がさて馬には馴れませぬから、二三里行くと尻は痛む體軀は疲れる其晩旅宿に着いた頃は總身五體が綿の様に

なつて、前後夢中に馬より飛下り、湯に這入つて薬石を濟まし、寢床に倒れた迄は覺があるが、後はグツと一ト寢入り白河夜船、丑満頃に不圖目を覺ましまして、圖らず思ひ浮んだのが財布の事！ハテ何處へ仕舞たであらうと、寢床の下を見たが姿は見えず、荷物を調べても影も形もなし、サア大變な事になつた、あのお金が無い其時には、其れこそ腹でも切つて主人に申譯を爲なければならぬ、云は生命に代る大事のお金、コリヤ何うしたら好からうと思案に暮れとつおいつ、生きた心地も爲ませんでした、イクラ心を落着けて見ましても、何うも行衛が判りませんので、暫し途方に暮れて居りますと、門の戸をトン／＼と叩く音がする、ハテ今時分

何う云ふ人であらう、何用あつて来たものかと、何心なく表の様子を窺つて居ると、誰やら取次に出た様子、勿論話の譯柄は聞えぬが何でも急用らしい氣勢が、シンとした闇の間に受取れた、暫らくすると、遠しい足音が、トン／＼と廊下を傳つて、私の室の前で、バツタと止つた、ハツと見る間に、スラリと障子が開いた、見れば夜前臥具を入れて呉れた此家の女中、両手を着いて、モシ御客さん、夜前貴方が召しました馬方が、何か貴方に、御渡しする物があると申て、息堰切つて持て参りましたが、取次ではいかぬ、直々にお目に掛つてお渡しすると、斯様に申て居りますが如何致しませうとの言葉、ア其れでは、テツキリ財布に相違ない、今が今まで氣が附かなんだ。

が、馬の背中に忘れて来たのだ、ア、難有い忝ないと、天にも登る心地して、轉げんばかりに飛出して、其馬方に逢ふて話を聞けば、馬方の申すには、モシお客さん！誠に濟まぬ事を致しました、昨夕檀那をお送り申て、直様馬奴を連れて宅へ歸りました、定めて馬奴も疲れたであらう、早く休ませて遣らうと、手綱を曳いて厩へ参りました、鞍を下さうと手を掛けましたらば、圖らず指先さに當つた此財布、是れア大變！正しく先前の檀那がお忘れなされたに相違ないが、嘸ぞかし今頃は氣が附かれて、大層驚いておいでなさう、氣の毒な事だ、困つた事が起たと、後悔しても後の祭り、何はさて措き早くお届け申て、御安心致させ申ねば濟まぬと、實は

疲れた足で復もや引返すと云ふは退儀でありましたが、併し忘れた
 お方の御迷惑に較べますれば何でも無いと勇氣を出しまして、やう
 く只今駆けつけました、何うぞ改めてお受取りが願ひたいと、斯
 様に申ますから、ア、さうであつたか、其れは千萬忝ない、實は
 先前から氣が附いて、諸處を尋ねて見たけれど、皆目行衛が判らぬ
 ので實は活きた心地もなく途方に暮れて居た處だが、ようマア正直
 に届けて呉れた、難有いぞヤこれ馬方殿と、深くお禮を述べて、其
 れにつけてもあまり心の健氣さに、別に所持して居た十六兩のお金
 をば、聊かながらお禮の記しにと差出しましたらば、馬方は顔色を
 變へて突戻し、何を滅想な事をお仰います、こんなお禮を頂く程な

らば、何しにお届に上りませう、イヤ其れはさうでもあらうが、此
 れはホンの私の志、何うか請けて置いて貰ひたいと、強いて突出
 しましたれど、何うしても取つては呉れぬ故、然らば半分だけでも
 と、八兩にして出しましたが、其れでも中々聞いては呉れぬ、今も
 申上ます通り、お禮などが欲しい位なら、二百兩のお金をば初手か
 ら私が、ソツと内密で頂いて置いたからとて、よもや貴方は私を、
 何處の何誰と御存じある筈はない、其れでも事は濟むやうなもの、
 濟まぬは私の心の中、忘れられた者が其品を、忘れられたお方にお返し
 するのは、コリア皆當然の事で御座います、當然の事をして其れで
 お禮を頂いては、折角私が盡した志も、水の泡と消ゆる道理、頑

固な事を言ふ奴とお腹立も御座いませうが、何うぞ此ればかりはお
 赦し下されと、何と云ふても聞いて呉れませぬ、長らく押問答をし
 て居ましたが、果しが無いので私もつくづく困つて了ひ、其なら馬
 方、全體何うすれば好いのか、一旦男が斯うして出した物を、此儘
 引込ますと云ふ譯にも行かぬが、と申たらば、不精無精に馬方が
 其れ程までにお仰つて下さるなら、折角のお志を無にするも却て
 失禮、然らば私が往來の道の蠟燭代として、三百文程頂戴致します
 三百文の蠟燭を買へばナンボ山坂路でも、五里や六里で點し切れる
 事ぢや御座いませぬ、此外には鑑一文でも頂く譯には参りませんと
 イツカナ聞入れる様子もありませんので、あまり心の床しさに、こ

馬夫の誠實

れ馬方！見受けた所が失禮ぢやが、まさか汝も有り餘つた身代でも
 あるまいに、なんで其なにお金を欲しがらぬのかと尋ねましたら、
 揚櫃に兩手を附いて、涙ながらに馬方が、ハイようお尋ね下さい
 ました、如何にも仰せの通り見る影もなき馬方風情、何でお金の欲
 くない事がありませう、坂はてる／＼鈴鹿は曇る、あひの土山雨が
 降る、雨が降つても風が吹いても、唯の一日でも休む譯には参りま
 せぬ、其れは／＼、手に取る馬の綱よりも、まだ／＼細い烟を立て
 、やう／＼其日を送る日暮し稼業、何しにお金が欲くなからう、
 去りながら私の里には、中江先生とお仰つて、其れは／＼豪い先生
 がお在なさいます、其處で隣村の田吾作や、村の八藏などが、農業

の間を見ては先生の所へ参りまして、讀書算盤、其外色々の事を教
 ります、私も若い者の仲間に入つて、先生の御厄介になつて居り
 ますが、常々先生のお仰るには、誠正以て其身を修めるとかお仰い
 まして、何でも人と云ふ者は誠正が大切である、誠正さへあれば、
 身分の高下や稼業の善悪などは、決して気にするには及ばない、誠
 の道を明かにするのが何より肝要ぢやと、斯様にお仰います、其處
 で皆の者が相談しまして、何でも先生のお仰る事は、縦令一つづつ
 でも互に身に行ふて、其れを御恩返しに爲やうぢや無いかと申て居
 ります、其れで私が斯うして貴方のお金を届けましたのも、皆是れ
 誠の道を踏んだまでのこと、貴方がお金を忘れて下されたればこそ

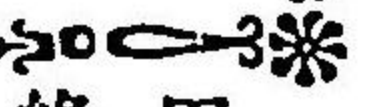
斯うして私が誠の道を踏むことが出来たので、云はゞお禮は私の方
 から差上ねばならぬ譯、其れをア、ベ、コ、ベに貴方から頂くと云ふ法が
 ありますものかと、會釋もそこへ出て行きましたが、出て行く
 後姿を両手を合して拜んで別れたが、ナンと先生！世の中には感
 心な者もあれば有るぢや御座いませんかと、隣座敷の町人が物語つ
 たので、先前よりの長物語をジツと聞いて居た熊澤蕃山、覺えずホ
 ンと膝を打つて「嗚呼我ながら不覺の至り」とお仰るから、町人希
 見な顔をして「其りや何う云ふ譯で御座いますか」イヤ外では無い
 が、實は予は此度京に上り、好む師匠を求めんと洛中洛外尋ね廻は
 れど、不幸にして其意を果さず、心ならずも只獨り、故郷に歸へる

道すがら、圖らず聞いた今の話、如何に燈臺下聞しとは云ひながら
 同じ江州に其様な、貴いお方がお在なさらうとは、昨夕の夢にも知
 らなんだ、かゝる話を聞く上は一刻も猶豫はならぬ、早速其先生に
 お願い申し、御教訓に預らうと、大に喜ばれたので、町人も話甲斐
 があつたとて俱に喜び、其夜は旅宿に泊りましたが、熊澤蕃山夜の
 明くるを待兼ねて、支度もそこ〜に道を急いで中江先生の門を叩
 き、一命を懸けてお願い申て遂に門人となり、大に陽明學の奥義を
 極めたのであつたが、今は中江先生や熊澤蕃山の事ではなく、先の
 馬子の行爲に就て深く感じて貰ひたいのである、啻に人間ばかりで
 なく、人間以上の神や佛をまでも感動せしむるものは、此誠正より

外には無いのである。

其十 乞丐の氣焰

「後のこと明日の活計を思ふて、棄つべき世を捨てず行ずべき道を
 行せずして、徒らに日夜を過すは口惜しき事なり、只思ひきりて明
 日の活計なくば飢へ死もせよ、寒へ死もせよ、今日一日道を聞いて
 佛意に隨て、死せんと思ふ心をまづ發すべきなり、然るときんば道
 を行じ得んこと一定なり」とは、承陽大師の御親訓である、去れど
 世の人々は、所謂飢え死寒え死の度胸が据らず、縦令不正不義の日
 送りにもせよ、一日も長生したいと希ふ故、道に契ひ佛意に隨ふ事



が出来ないので、實に歎はしい次第と云はねばならぬ。
 野田山と云ふ所は加賀侯の墳墓の地であつて、代々の精靈が皆此處
 に葬つてあるのである、其れゆゑ藩中の各士族も亦多く其麓に地を
 トして其れづゝ祖先を祭つて居る、ところが土地の習慣で、孟蘭盆
 になると墓の入口に於て篝燈を焼いて佛に供養をするのであるが、
 同じ藩中でも祿厚く家豊かな人々は其處に假小屋を作つて、番人を
 附けて通宵番をさせて置きなすが、貧乏人はさうも行かぬから、家
 族の者共が初夜の内だけ往つて附いて居て、夜半過ぎには皆還つて
 來るのが例になつて居る、すると、土地の悪少年共が寄集つて、施
 主の還つた後を伺つては其篝燈を消して、盗んで持て來るのである

これも毎年の例のやうになつて居る、所が或時、例に依て二三の悪少
 年がコツツリ篝燈を盗みに往つた、すると、今しも墓場の陰に葉を
 被つて寐て居た一人の乞食が、ムツクと起きて「人が折角先祖様の
 爲に供養して往つた物を、貴公等は亂暴にも盗んだりなぞして、甚
 だ宜しくないぢや無いか」と咎めた、すると悪少年共は口々に罵つ
 て「何ッ、土乞食奴！貴様一體何處の奴ぢや、此方共の爲る事に餘
 計な嘴を入れさらすなッ」乞食は徐ろに「ハイ私は乞食で御座いま
 す、如何にも貴公等の云ふ通り乞食に違ひない、乞食には違ひ無い
 が泥棒は爲ませぬぞ、貴公等の様に人の物を只取つて、其れで生計
 を立て、行けば、何も乞食をするにも及ばぬが、吾々の様に正直な

乞食の氣焰

道を渡る日には、場合に依つては乞食でもせねば喰つては往けぬわえ」と述べたので、流石に悪少年共も二の句が續げず、狐鼠くくと退散したとの事である。

其十一 烈女美智能

男尊女卑と云ひ、女尊男卑と云ひ、又は男女同權など云つて、世間には八釜しい議論もあるが、吾佛教では男と云ひ女と云ふ其體軀の上から尊卑の區別を附けるのでは無い、「其形陋しといふとも此心を發せば已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ佛道極

妙の法則なり(修證義)「ぢや、此心と指したのは菩提心と云ふ心で、即ち自己を忘れ身命を擲て専ら國利民福の爲に盡す事を申たのである。

世は刈菰と亂れたる王政維新の前年、天下の志士は皆京都に集つた其目的は云ふまでも無い、幕吏は嚴しく之を捕へて其れく苛酷な刑罰に處するので、志士の方では劍呑で堪らない、かうなつては危険だと云ふので、皆々密々と集つて將來の大計を計畫して居た、所が幕府の方では油断なく、猫が鼠を探すやうに中々草を分け雲を披いて、愈々綿密に探索するので、幾多の志士は風の音にもヒヤリとし、木にも草にも氣を置くやうになつた、殊に志士の首領株たる薩

摩の西郷南洲長州の木戸孝允など云ふ名士の身の危険さは中々で、何時も背後に暗殺者が付き纏ふて居る様であつたけれども、時勢は

此等の名士をして身の危険を思ふ餘裕を與へしめないで、今夜は

此處明日は何處と、其中を潜つて密議を凝して居たが、幕吏の探偵

如何にも厳しく、最早や一寸の隙も無くなつたので、一同は清閑寺

の本堂の床下に潜んで、近き將來に於て實行すべき商議を密々凝し

て居た、すると此頃薩人志士の一人の娘に、美智能と云ふ十七八の

烈女があつた、然るに父何某は不幸にして幕吏の手に捕はれて、無

慘くと刑場の露と消えましたが、美智能は心賢くしてまだ一處女

の身ながらも大に期する所あり、直に亡父の遺志を續で志士の仲間

に加はり、國事に奔走して居た、西郷南洲は其志の堅いのを見て
取て、同志の間に機密を通ずる使者に之を使つて居た、所が美智能
は男子と違つて、捕吏の目を引くこと絶えて無く、常に其大任を全
うして居た、南洲一派が尤も危険を極めた清閑寺床下時代の頃も、
美智能は巧兒に姿を變へて、急を要する時は合圖を以て一同に知ら
せる爲に、日夜其境内を去らず、忠實に見張りをして居たと云ふ事
であつた、然るに幕府の捕吏は何時しか之を知つたものと見えて、
或日清閑寺を襲ふたが、美智能は早くも之を知つて、一同に急を告
げて幕吏の来る前に他に移らせて仕舞つた、すると此事が又何時し
た捕吏に知られたので、美智能は或日京極邊で捕吏の手に捕へられ

た、丁度此日美智能は町家の娘に姿を假装して、或使命を帯びて小室邊まで行く處でありましたが、計らずも此處で最後の運命に接したのであつた、捕吏に捕はれて行きながら美智能は途中で窺かにかう思ふた、「男子と違つて自分は今日まで唯の一度も捕吏に尾けられた事はないのに、今日に限つて知られたと云ふのは、誰か様子を知らてる者があつて密告したのに相違ない、して見ればもう之が運の盡きだ、所詮遁れる道は無い、假令何んな憂目に遭ふても一大事は明すまい」と其決心の堅き事は金鐵も恥しき程で、美智能は少しも動する氣色なく、捕吏に捕はれて行く所まで行つた、其れから捕吏頭の前に引かれて段々と糺明されて、志士一同の在所を明白に告げよ

と迫られた、「存知ません」と膠無く答へて、美智能は微塵恐れる色もありませんでした、捕吏の頭は聲を剛まし「イヤさう白々しい事を云ふな、其方が今日までの振舞は最早や残らず證據があがつて居る、西郷一派の輩は彼の清閑寺から何方の方角へ行つたぞ」存知ません「イヤ知らぬと云ふ事はない、サア有體に白状をしる」イヤ何と仰せられても私は存知ません「黙れツ」捕吏頭は屹度乙女の面を睨みつけて「いよく知らぬと云ふか」美智能は神色自若として「ハ、存知ません」すると代つた人の聲として「オイ、美智能さん、もうお前さんが幾何程隠しても駄目だ、サア惨な思をせぬ中に白状して、偏へに御上の御慈悲を乞ふのが好からうよ」と云はれて、美

智能は何思はず、イと振向くと、這は如何に、昨日まで同じ仲間の
 乞食、今日は捕吏の手先の七助と云ふ丹後生れの可惡奴であつた
 「さては此奴がッ」と其凜々しい眼に美智能は睨みつけた、「サア此
 れでもまだ知らぬと云ふか」捕吏の頭は嚴しく疊みかけた、最早や
 遁れぬ所と美智能は凝然と俯向きしました、「サア有體に」と捕吏の頭
 が迫りますと、兩手を膝にして俯向いて居た美智能の口から、タラ
 ーと血汐が流れた、「ヤア！」捕吏の頭は怪んで凝然と見つめると
 美智能は色白く肉福らかな願の邊に、血汐の流れる面をあげて凝然
 と捕吏の頭を見た、最早や何なに責め苛んでも其效驗はない、云ふ
 までもなく美智能は此時已に我舌を食切つて居たのであつた、容貌

花の如き而かも妙齡二八の乙女が此壯烈なる振舞に及んだので、捕
 吏の頭は荒肝を挫かれて、乙女の手前も恥かしい程見苦しく狼狽た
 けれども美智能は膝も崩さずに居た、併し死の影は早や其顔を掩ふ
 て來た、けれども只の一聲も苦痛を漏しませんでした、此悽慘なる
 光景に流石の捕吏も眉をひそめた、最後に美智能は早や眞蒼に變つ
 て來た面をあげて、並居る一座の顔を見渡し、一同の腹の底まで染
 込むやうな淋しい笑顔を示したが、やがて吹き來る一陣の風諸共に
 十八年を一期として、可惜烈女は此世に於ける最後の息を、靜かに
 引取りました。(女學世界、根岸文子)

其十二 愛語の妙力

古歌に「千々に咲く言葉の花もすなほなる、こゝろぞもとの根ざし
なりける」とあるが、すべて片言隻語と雖も能く回天の力を爲す程
の言語は、其心の根ざしが確かであるからである、修證義にも「愛
語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すな
り、慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり」とあり
ますが、此一切衆生を我が赤子の如くに懐ふと云ふ精神が、即ち回
天の力を爲す所以であつて、又た所謂愛語と云ふ美しき言葉となつ
て顯はるゝ原因なのである、苟も吾々が此精神と此言葉とを以て世

に處したならば、如何に世智辛い時代に在つても、必ず最尊最貴な
る人格が得られ、所有方面に向て偉大なる感化が興へらるゝ事と信
ずる。
昔宋の景公の時に天下大に旱して、三年間も降雨を見なかつたと云
ふ事である、其時景公は太上を召して此天災をトはしめた所が、人
身御供を天に捧げて神を祀つたならば、立るに雨が降るであらうと
言上した、其處で景公は堂より降つて北方に向ひ、稽首禮拜して仰
せらるゝには「吾今雨を請ふは唯だ吾民の苦患を顧ふ故である。然
るに今必ず人身御供を以て祀るべしとならば、宜しく予が身を御供
に備へて祀るべきである、決して吾民を以て祀るべきで無い」と宣

愛語の妙力

はせて、暫し其處にイみ玉へば、斯く難有き思召を天も感じさせられてか、未だ言葉も言ひ終らざるに一天俄かに曇つて、大雨沛然として降り千里の外までも濕したと云ふ事である、是れ能く天に従ひ民を慈み玉ふたからである。

又孔子の十哲の一人、二十四孝の一人として世に名高き魯の憫子騫は、名を損と云ふて居たが、幼き時に母に後れ繼母の手に人と成つたが、繼母に三人の子供が生れて都合憫子騫と共に四人の兄弟となつたのである、然るに其繼母は婦徳の備はらない慳貪邪見な人であつたから、憫子騫を惡む事は尋常一様でない、或年の冬の如きは寒威肌に徹すると云ふ様な寒空に、三人の實子には十分暖かに

愛語の妙力

着せて置くにも拘らず、憫子騫一人には蘆の穂を入れて綿入に見せかけたる、薄い庵末な衣服を唯だ一枚纏はせて置いたのであつた、けれども憫子騫は天性至孝の子であつたから、繼母に對して一念恨めしげなる精神を起さぬばかりか、今日此頃の寒さ冷さを、顔の色にも表はさずして、能く母を敬ひ三人の弟をいつくしんで決して渝る心を持たなんだ、ところが一日父が憫子騫の衣服を認めて大に立腹し、立ろに繼母を出さんとした、哀れなる憫子騫は涙ながらに父の膝に取籠つて「今此母様がお在になれば、私一人の寒い目で事が濟みますが、母様をお出しになれば三人の弟までも皆繼子となつて、此後如何なる憂目を見ねばならぬか知れませぬ、其れゆゑ私一

人は何の様な辛抱も致しませうから、何うぞ母様を追出す事を思止つて下さいませ」と父をなだめました、其處で、父も大に其理に感服して離縁を思ひ止まり、繼母も亦憫子奪の至情に感激して前非を改め、爾來春風秋雨、和氣藹々たる家庭を作つたと云ふ事である。

其十三 阿含經の四婦

大寶積經に「假令百劫を経るとも所作の業滅びず、因縁會遇の時果報還つて自ら受く」とあります、三世十方を通じて此業力ほど恐ろしいものは無いのである、其業力の滅びざる事をば佛陀が四人の婦人に喩へられた話が、阿含經の中に出て居る。

或一人の男子が四人の婦人を携帶して居た、而して甲の婦人は取別け夫の最も重じて居る所であつて、行住坐臥、常に進退を俱にして寸時も側を離さない、勿論美服佳肴は心のまゝに供して嘗て違背する所がなかつた、乙なる婦人は其寵甲に次いで愛を注ぎ、同じく坐臥を共にして相談笑し、會へば則ち喜び離るれば即ち憂ふると云ふ風であつた、丙婦人はたま〜逢ふ機會があれば滿更悪くもなければ、さりとして明暮れ左右を離し難ないと云ふ程にもあらず、唯だ窮困疲極に際して之を思ひ起すに過ぎなかつた、而して丁なる婦人に至ては給使作務の用に供へて、事あれば之を使役し事なくば常に放任して、更に愛しみ親しむと云ふ事は無つた、然るに偶々其夫たる

人病床に臥し、今や臨終と云ふ際に及んで甲婦人を召して「私が

生命も最早や旦夕に迫つた事であるが、彌々冥土へ旅立ちと云ふ時

には、汝も一處に尾いて行つて貰ひたい」と云ふたれば、其婦人が

答へて云ふのに「其れは貴方御無體と云ふものです、ナンボ何でも

冥土までお供をするのは嫌で御座います」之を聞いた夫は最と不興

げに「其れは非道い、私は是れまで汝を誰よりも鐘愛して、嘗て一

度たりとも汝の意に背いた事はないのに、何せ汝は私の臨終の願ひ

を聞いては呉れぬのか「其お恨みは御尤では御座いますが、何ぞこ

ればかりは御赦し下さいませ」餘儀なく乙の婦人を喚んだ、「何うち

や、汝私と一處に行つて呉れぬか「行けとお仰れば強ち行かぬ事も

ありませんが、併し四人の内一番大事にかけて、御寵愛遊ばした
甲婦人さへお聞き入れなさらぬのに、何で私がお供が出来ませう」
「コレ、そんな嫌味を云はずに……私が初め汝を求める時には、其
れは云ふに云はれぬ艱難辛苦をしたのだ、其れこそ暑さ寒さは
云ふに及ばず、時としては喰ふ物も喰はず、飲む物も飲まずに心配
して、其れでやうく我手に入れたのだ、其れを思へば極樂は愚か
地獄の底まで尾いて行つて呉れたからとて、満更罰も當るまい、何
うぢや是れ婦人！」此れは又迷惑千萬、ソリヤ貴方のお仰る通り、
最初何の様な御辛苦遊ばしたか存じませんが、何も妾の方からお願
申た譯ではなし、云は貴方が御勝手に遊ばしたと、其れを今更

阿含經の四婦

何の彼のお仰られても、妾には御返答が出来ませぬ。夫は心細げに
 丙の婦人を招いた、而して先きの如くに告げたのである、すると「妾
 は是れまで貴方の御恩を受けた事は能く存じて居ります、ですから
 貴方が臨終の際には墓場までお供を致します」と答へた、先きの二
 人に較ぶれば稍々人情を辨へては居るもの、呆れ返つた夫は、無
 益とは思ひながらも終に丁婦人を喚んで、而して吐息つくく、又以
 前の様に告げて見た、すると此女は意外にも「妾はもと父母を離れ
 て御側へ参り、日々貴方にお給侍申上げて居るので御座いますれば
 生死苦樂は固より俱にする覺悟でありますから、如何にも貴方の仰
 せらるゝ如く、三途の川も死出の山路も、俱に手を取り御供を致し

ませう、必ず御安心下さいませ」と答へたのであつた、かくて此夫
 は己が意に叶ふたる三人の婦人を伴ふ事能はずして、遂に意に満た
 ざる丁婦人を随へて出立したとの事であるが、抑も佛陀が此話柄を
 何に喩へられたのかと云ふに、甲婦人と申たのは吾々の肉體を指し
 たのである、誰人と雖も身を鹿末にする者は無い、人の身を愛する
 事は甲婦人に過ぎて居る、されど命終の時には身は地に僵れて肯て
 従ふべきで無い、乙婦人は即ち金銀財寶であつて、人々財を得れば
 大に喜び之を得ざれば甚だ憂ふ、されど命終の時の頼みには決して
 ならぬ、丙婦人は父母妻子兄弟姉妹、朋友奴僕の類を云ふたもので
 現世に在てこそ此等の者も互に相助け相慕ふもの、命終の時に及

んでは歎き悲んで會葬こそすれ、敢て墓地より先さへ隨ひ呉る、者
 は一人も無い、皆此處に死骸を棄て、還るのである、人が死んで百
 日目の事を卒哭忌と云ふが、卒哭忌とは哭き納めの命日と云ふ事で
 ある、けれど今の世に誰が死んでも、百日間も哭き明して呉れる親
 切な者は無い、若しあると思ふ人があるならば其れは其人の自惚根
 性と云ふものだ、百日どころか半分に割引して五十日間も哭いては
 呉れぬ、マア、初七日までが關の山だ、其れも保證は出來ぬ、之
 を思ふと實に心細くなる、最後に丁婦人と云ふたのは吾々の心より
 生ずる業を指したものである、心はお互に放任勝ちのものである、
 其心猿意馬が二六時中得手勝手に振舞ふものであるから、貪慾瞋恚

愚痴と云ふ様な三毒を起して、終には諸ろの悪業を造るに至るので
 あつて、此悪業は嫌が應でも吾身に附き纏はつて離れないのである
 其れ故吾々は其業力の所感に依つて未來の果報を受けねばならぬ、
 此處の道理を承陽大師も修證義に「無常忽ちに到るときは、國王大
 臣親暱從僕妻子珍寶たすくる無し、唯獨り黄泉に趣くのみなり、己
 れに隨ひ行くは只是れ善悪業等のみなり」と仰せられたのである。

其十四 餓鬼と天人

其れに就て、阿育王譬喻經の中に斯う云ふ話が出て居る、昔印度僧
 の多くは塚間又は寒林と云ふて、墓場の在る林や、或は大きく茂つ

九〇

た樹の下に於て坐禪觀法を行つたものだが、或時一人の僧侶が例の如く或墓原に於て坐禪を爲て居た、すると一の瘦せ衰へたる餓鬼が現はれて、頻りに一の屍を打ち打擲する様子、印度にては其頃人間の死體を土中に埋めずして、其儘林中に放棄したものださうな、之を林葬と稱へて居る、さう云ふ風であるから、今此處に現はれた餓鬼も、あたりに散亂して居る骸骨の中から一を擇んで打擲したものであらう、僧侶は此有様を見て不思議に思ひ「汝は其死屍に何答あつて、斯くは恨めしげに打ち打擲するのか」と問ふたれば、餓鬼は涙ながらに「ハイ此死屍の前世は何を隠さう私で御座いましたか、前世に於て之れが惡事を働きましたゆゑ、現在私 は此様な淺間し

い餓鬼道に墮ちて、日夜に苦患を受けて居ります、其れで餘所ながら今此死屍に恨みを述べて居るので御座います」と云ふ故、僧侶は「愚かな奴、何をつまりぬ事を云ふのか、汝が餓鬼道に墮ちた原因は決して其死屍が惡事を働いたからでは無く、汝の心が惡を逞うしたからである、恨みがあるなら汝の心を恨め、打擲したければ汝の心捕へて打擲せよ」と説き諭した、須臾すると、今度は一人の艶麗しき天人が天降つて来て、一の死屍の上に天の曼陀羅華を雨らし如何にも嬉しげに飛廻つて居るから、以前の僧侶は「汝は何故に斯く臭氣氛々たる死屍に花を供ずるのか」と尋ねたれば、天人は「外でも御座いませんが此死骸が、前の世に於いて善事を働きましたゆ

系、今私は此の如く天上界の快樂を受けて、安穩に生活する事が出来たのであります、其れ故聊か御恩報じの記しにと存じまして、斯く花の供養を致して居るので御座います」と述ぶるゆゑ、「是れはまた奇怪千萬！其死骸が善事を爲したとは如何なる理由か、其死骸が決して善行を勵んだのではなく、其死骸をして善事を爲さしめたものがあゝるに違ひない、即ち御身の心が善を爲さしめたのである、スリヤ心に向て花を供じ心に向て報恩の誠を致すが當然では無いか」と諭されたさうである、此意を取つて一休禪師が山姥の唄に「寒林に骨を打つ靈鬼、泣く泣く前生の業をうらむ、深野に花を供ずる天人、返すくも幾生の善を喜ぶ」と詠ぜられたとの事である。

其十五 異體同心の武時夫妻

元弘の亂の時、後醍醐天皇は名和長年の一族百五十人に擁せられて伯耆の船上山に行幸あらせられた、而して大に近國に義兵を募られたとき、召に應じて馳せ参じた忠臣義士の中に、九州の豪傑菊池武時と云ふ武士があつた、菊池氏は其先は中納言藤原隆家より出たもので、世々肥後の守であつた、武時は曹洞宗の大智禪師に歸依し、入道して法名を寂阿と稱へて居たが、今勤王の師を興すに方つて小貳貞經大友貞宗をかたらふて、筑紫の探題北條英時を討たんと計つた、然るに小貳大友等は中途變改して應じない、此に於てか武時大

異體同心の武時夫妻

に怒つて「かく言ひ甲斐なき不忠不義の輩を頼み、かゝる一大事を
 思ひ立ちたる不覺さよ、いではれより彼等が許へ行き差しちがへて
 相果てん」と、髮逆立てし折柄、妻の某女夫を諫めて、「恩のために
 は身を忘れ、義によつては命を棄つる、皆是れ勇士の習なれど苟に
 も一旦御味方仕らんと、繪旨に添へて錦の御旗を給はりながら、
 忽ち變心して味方の裏をかくやうな、道に背いた逆臣どもと、生命
 の取りやり遊ばすよりは、直に探題英時に向て討死なさるが、御身
 のお爲と存じます」と申た。武時大に其意を諒して家兵百五十人を
 率ゐて、探題の館に押寄せた、探題英時大に窮迫してまさに自盡せ
 んとした一刹那、小貳大友の援軍がやつて來たので、武時は嫡子肥

後守武重に向て「我今小貳大友等に出しぬかれて、茲に討死する事
 固より義によつて命をおとす武士の覺悟、決して口惜しいとは思は
 ねど、汝是より館に歸へり、城を固め兵を起して我此の恨みを報ぜ
 よ」と云つたが、武重いかで父の討死を見捨て、おめく故郷に
 歸らるべき、暫し躊躇ふ様子なれば、武時は聲荒らげて「汝を歸へ
 すは天下の爲だ、聞きわけ無いカツ」武重終に力なく故郷に歸
 つた、其時妻に書き贈つたる一首「故郷に今夜ばかりの命とも、し
 らでや人の我を待つらん」あはれ武時は此役四十二歳を一期として
 一步も退かず討死した、妻は最後の此歌を見て武重に向ひ「いかに
 肥後の守！御身必ず父の遺志を継ぎ、時を得て朝敵を滅ぼし大に軍

功を樹つべし、今は夫の待ち給ふべければ、」とて、「故郷も今夜かぎりの命ぞと、知りてや君のわれを待つらん」と書送つて、終に自害を遂げたのである、此の如きを眞實異體同心と云ふので、末代まで貞婦の龜鑑とするに足るのである。

又彼の「武士のやたけ心の一筋に、思ひ切るとは神はしらずや」と云へる武時の歌も、矢張り此役に於て詠じたのである、英時を博多の城に攻むる途中、櫛田の社と云ふ社前を過ぎんとしたとき、武時の乗馬忽ち足を止めて進まないで、従者の中に此れは神の御崇りであらうと云ふ者があつた故、武時大に怒つて斯く詠じ神殿の扉に向つて馬上ながら、ハタと一矢放つた所が、馬漸くに進んだとある、

武時の正を踏んで恐れざる面目は、此一事に就ても明らかであらう「徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ(修証義)」と承陽大師の御垂誨になつたのも、この事である。

其十六 嗚呼忠勇なる齊光號

此の菊池武時の妻を畜生でいつたのが齊光號の話である、事の概略は當時の「萬朝報」に出て居たが、齊光號と云ふのは九州某師團の騎兵上等兵吉井政男と云ふ人の乗馬で有た、政男は先年入營した際己が乗用として此馬を下附されたのである、爾來朝夕の手當は云ふ

に及ばず、何事につけても誠のあらん限りを盡し、恰も骨肉のやうに愛撫を加へて居た、ところが三十七年の春、端なくも日露の間に戦端が開かれたので、吉井上等兵も多年乗馴した齊光號と共に、遠く満洲の野に渡つて、此處の激戦彼處の逆襲、大小幾多の戦場に蹄の音勇ましく轟かして、微傷一つ負はずに偉大なる軍功を樹つる華々しさ、敵も味方も天晴れの武者振よ逸物よと賞め立つれば、政男は齊光號の賞めらるゝのが我が手柄を謳はるゝよりも嬉しく、萬事意に任せぬ戦場に於てさへも、乗馬の手當ばかりは毫も怠らなんだが、かれこれする内に沙河の大會戦が起つた、頃は三十七年十月十五日、政男は日頃の勇氣百倍して、ユラリ齊光號に跨るや否や、獅

鳴呼忠勇なる齊光號

子奮迅の勢を以て敵陣深く切入つた、敵も必死の覺悟であるから此會戦の激しさは物に譬へんやうも無い、見るゝ屍の山を築き血汁の川を爲すと云ふ有様、此日恰も政男は軍旗保護の任務を帯びて、師團長の側に控へて居たが、圖らず一彈空を裂いて飛び來り頭上に於て破裂した、何かは以て堪るべき政男はアツと一聲馬より落ちて壯烈無比の最後を遂げた、斯くとも知らぬ乗馬は忽ち跳り上つて半町餘りも駆け過ぎたが、背の主なきに驚いてか狂氣の如くに取返へし、倒れし主人の軍服を啜へて起さんものと焦心りつゝあつた、されども政男は已に絆切れて砲煙彈雨の間に恨みを呑んで居た、乗馬は悲しき聲を張上げて尙も揺り動かして止まないのである、其嘶

さに驚き他の一兵卒駆け来て政男の死體を收容し、後方の村落に
 手厚く葬つたのであつたが、齊光號は其れより主人の墳墓を離れず
 糧も喰はねば水も飲まずして、六晝夜泣暮し泣明した揚句、肉落ち
 氣衰へて終に政男が初七日の夕、あはれ主人の墓前に敢なき最後を
 遂げた、嗚呼「如是畜生發菩提心！」げに大和武士にも優つたもの
 である、今之れを見聞せし人々は一入衰れを催して、いと懇ろに主
 人の墓側に葬つて「嗚呼忠勇なる齊光號」と書したる墓標を建てた
 との事であつた。

其十七 クリミヤの天使

世の中には随分矛盾した事が澤山ある、中に就て戦争と赤十字事業
 などは最も其甚だしいものであらう、一個の地雷を敷設して幾千の
 兵を塵に爲やうと計るかと思へば、又水雷を發射して一萬何千噸
 と云ふ大軍艦を粉微塵に打碎かうと爲る、かゝる慘忍なる大悲劇が
 到る所に演ぜらるゝ間に、此處の岩陰彼處の谷間に朱き十字を染出
 せる旗を押立て、味方は云ふに及ばず敵の傷病者までも一々收容
 して、彼我の區別なしに一視同仁の誠を盡すのが赤十字病院の天職
 であるが、抑も斯る貴き事業が何時の世如何なる時代に、誰が手に
 因つて始められたかと云ふに、今より五十七年以前に歐羅巴で名高
 い「クリミヤ戦争」と云ふ戦争が有つた時、英國の女傑ナイチンゲ

ールと云へる婦人が、野戦病院を經營したのに基いて、今日の様な發達を遂げたのである、クリミヤ戦争は本と露西亞の皇帝ニエラ

ス一世が土其古と云ふ國を蠶食せんが爲に、同國政府に對して土其古領内の希臘教徒保護權を得やうと企てたが、土其古政府が之に反對した所から、端なくも起つた戦争であつて、最初土其古軍は散々に打破られ手も足も出なくなつたのである、之を氣の毒に思ふた佛

蘭西のナポレオン三世は、英國と同盟して土其古を援け、大に露國の暴戾を懲さうとした、其處で彌々話が調ふて、開戦の翌年千八百

五十四年に、英佛聯合艦隊は露國の一大軍港クロンスタツド要塞を攻めたが、不幸にして勝つ事が出来なかつたから、今度は陸軍を

以てクリミヤ半島のセバストポールを圍んだ、去りながら當時は野戦病院の設備が乏しかつたから、敵の傷病者などは固より眼中に無いが、味方の者と雖も之に充分なる手當を施す事が出来なかつた、おまけにセバストポールは露國の金城鐵壁で、露兵は之に立籠つて持久の策を取つたから堪らない、遠征の將士は糧食乏しく悪疫流行して、無慘く斃死する者日に千を以て數ふると云ふ有様であつたが、衛生の法も看護の術も至て幼稚の時代であるから、其れれ救護の手段方法は講じて居るものゝ、何等の功も奏しない實に悲惨な光景であつた、話變つて英國のリーハーストと云ふ市街にナイチンゲールと云ふ婦人が在つたが、此婦人は天性慈悲深く同情心に富ん

だ人であつたから、幼い時より諸外國の書物にも眼を曝し、又實地に就て博愛慈善の業務に憂身を奮して居たが、三十歳の時には遙るく、獨逸に渡つて、學校、病院、感化院と所有慈善の事業を研究して、遂には身自ら看護婦となり、歸朝の後は英國に於て未だ何人も氣の附かない、廢兵救護病院と云ふを創設して多年の修養や研究の上から、莫大の費用と精力とを傾けて、獨立獨行、身命を此事に捧げて居た。併しながらナイチンゲールは未だくこんな事位では満足が出来ない、更に大なる手腕を振ふ時節が來よかしと希つて居た、ところが、時も時、折も折と今お話ししたクリミヤの大慘劇が演じらるゝ場合となつた、で、英國の陸軍大臣ヘルバルト氏は取敢

へずナイチンゲールに書面を贈つて、遠征將士の救護を依頼した、ナイチンゲールは豫て待ち設けつゝ、あつた事ゆゑ、決然起つて快諾の意を告げた、而して心男々しくも單身數千里の戦地に向はうとした、この健氣なる決心を見た英國の貴婦人等は、皆大に感動して我もくと隨行を志願する者が、引きも切らないので、ナイチンゲールは此等志願者の中から、四十二名の婦人を選抜して遠征の途に上つたのである、彌々クリミヤへ到着して見ると、此は如何に實に驚いた、糧食は足らず悪疫は激甚の間に在て、數多の將士は晝は血潮流るゝ修羅の巷に病軀を提げ、夜は草を褥に露營の夢を辿り、昨日は戦友を弔ふて野邊の送りを濟まし、身の、今日は送られて悲しさ

涙の手向けを受くる有様、幾許もなくして將卒の死するもの軍馬の
 驚々もの、其數萬を以て算ふる程となつた、普通の婦女子が此の
 光景を一目眺めたならば、忽ち氣も消え魂も失するばかりであらう
 だ、慈悲と同情とに満たされたる、健氣なるナイチンゲールは、か
 かる慘憺たる戰場に在つて弱む心は微塵もなく、同士四十二名の總
 大將となつて、傷病兵の收容から看護に至るまで、己が一身に引受
 けて、晝夜一睡の眠りも取らず三度の食事も打忘れて、終始一貫國
 家の爲に盡す男々しさ、又貴さ難有さ、當時「クリミヤの天使」と
 まで賞賛へられ、拜まれたのも決して偶然では無い、去りながら金
 鐵の如くに鍛へられたる身體さへも、此猛烈なる悪疫には殆ど犯さ

れぬ者なかりし程の場合であつたから、心ばかりは其れ以上に堅き
 女丈夫も、あはれ纖弱さ身の途には病毒に感染して、今は却て人の
 情けを手頼る身の上となつた、されどナイチンゲールは重き病床
 に呻吟しつゝも、猶且つ戰場の光景と、傷病兵の身の上とは、渠女
 の夢にも忘るゝ能はざる所であつた、げに天も渠女の赤心を感じ玉
 ふてか、幾許も無く病氣全快し、たがストポールも陥落して千八百
 五十六年巴里の和約によつて全く終結を告ぐる事が出来たが、此戰
 争を終へて目出たく凱旋した時、上は女王陛下より下は匹夫下賤の
 者に至るまで、一人として此女丈夫の功勞を感謝せぬ者はなく、爲
 に五萬ポンドと云ふ巨額の義捐金までも忽ち出來て、渠女の死後セ

クリミヤの天使

ント、トーマス病院内にナイチンゲール院と云ふが設けられ、看護婦の養成所として今尚渠女の名と俱に、いと薫ばしく榮えて居ると云ふ事である、之を以てもナイチンゲールの功績が如何に顯著なものであつたかと云ふ事が、容易に窺はれますが、今の赤十字事業は全く此時胚胎したものである、佛陀も病田又は悲田と稱して、八福田の中に病人を救済する事を示された事であるが、何うぞ我佛教國にも將來此の如き女傑が續々輩出して、眞實國家の爲に盡す所あらんを希ふのである。

其十八 英雄の心事

天正十年織田信長が武田勝頼を天目山に攻めた時、勝頼は戰大に破れて其身は遂に山籠の、田野村と云ふ處で討死した、其時信長は勝頼の首級を見るや否や、怒髪天を衝くと云ふ權幕で、「おのれ青二才奴！、まだ嘴黄色き分際を以て、此大將に敵對爲すとは言語同斷、今こそ思ひ知りおつたカツ」と、カアツと唾を略さかけて、ボンと足蹴に蹴倒した、然るに一方の大將徳川家康は、無慘なる勝頼の首級を眺めて、「嗚呼敢果ない姿にお爲りなされた、併し勝負は戰場の習、時の運とお諦らめ下さるべし、現在此世に在つてこそ、互に敵味方と引別れ、共に鎬は削るもの、未來は必ず怨親平等、南無阿彌陀佛」とポロリ涙を落されたと云ふが、同じ武士でありなが

ら斯程にまでも心の違ふものか、この雪と炭ほどの相違ある話は、
 日露の戦役の際にも、「萬朝報」によつて傳へられた。
 明治三十七年に善通寺師團から近衛の參謀に榮轉した某中佐は、戦
 地の負傷兵が歸還するたびに、師團長代理として停車場まで出迎へ
 るのは好かつたが、中佐の挨拶は斯うであつた。「汝等は負傷して還
 つたも好いが、一體軍人と云ふ者は、戦地に出れば死ぬるものに定
 つて居る、其れのために負傷をせして還るとは恥しくないか、併し其
 れはまたしも恕すべしとして、病氣に罹て歸へる者に至ては實に言
 語同断だ、軍人として誠に愧づべき事だから、以後は大に注意しろ
 ツ」此無法の命令を聞いた兵士は、何れも無念の齒噛みをしたと云

ぶが、此無法中佐の轉任後、彼の位置に代つた石田正珍と云ふ大佐
 は、又世にも稀なる優しい軍人で、出迎に出たり病院を見廻つたり
 爲る度に、「諸君が斯うして治療を受ける程の、働きをして呉れたれ
 ばこそ、我軍隊の名譽が揚るのだ、殊に風土氣候の異つた滿洲の野
 で、悪水を飲たり雨露に打たれたり、所有不攝生を敢へてする身の
 病氣に罹るは理の當然だ、諸君は能くこそ國家の爲に病人となつて
 呉れた、此上は負傷者も病者も一日も早く全快して、再び自分と俱
 に出征して、華々しい功を樹てやうでは無いか」と、且慰め且勵ま
 して居たので、聞くもの何れも感謝の涙を垂れん者は無つたとの事
 であるが、昔も今も情けを知らぬ武士の、永く榮ゆる道理は無い、

織田信長と某中佐、徳川家康と石田大佐、雪と炭との上に就て能くも似通ふて居ると思ふ

其十九 無言の判決と眞正の懺悔

神道に於ては禊ひ清むると云ひ、基督教にては悔い改むると云ひ、又佛教にては懺悔と云ふ、皆是れ大同小異の教義であつて、共に其道に入るの門たる事は同一である、取別け我曹洞宗に於ては、此懺悔の方能く罪根を銷殞して受戒入位の大安心を得しむると云ふのであるから、懺悔に重きを置いて居る事は云ふまでも無い。

昔備前の國に或富豪があつて、父の歿後兄弟二人が其家資を争ふた

事がある、然るに兄にも弟にも各々一味黨援の者が百人餘りもあると云ふ勢で、雙方中々我見の角が折れ無い、何と慾ほど恐ろしいものはないではないか、「父は子の悪を説き、子は父の悪を説き、母は女の悪を説き、女は母の悪を説き、兄は弟の悪を説き、弟は兄の悪を説き、姉は妹の悪を説き、妹は姉の悪を説き、家室宗族の轉た相誹謗するは、是れ皆貪慾の爲なり（所欲致患經）」ぢや、斯様な鹽梅で到底示談の見込みが立たない所から、遂に法廷に於て其黑白を争ふ事となつたが、何がさて原被兩告の申立が頗る複雑して居て、容易に判決を下す事が出来ない、其れが爲め事實の審問に數年を費したけれども未だに判決が出来ぬと云ふ始末、其處で、泉仲愛（熊

無言の判決と眞正の懺悔

澤蕃山の弟)と云ふ人が甚だ之を憂ひて、自ら代つて裁判官となつた、而して兄弟二人を召出して一室に幽閉した、頃は隙漏る風も骨に徹して寒じいと云ふ嚴寒の眞最中、仲愛は獄吏に命じて一個の火鉢に小さき火一つを入れ、之を室の中央に置かした、して三度の食事は必ず二人相併んで喫する事に定めてある、三晝三夜此の如くにして唯だ茫然と遊ばせて置いた、未だ一回も訊問等をした事が無い、而して其間仲愛は隣室に居を占め、而も二人の己が愛兒を左右に侍らして事を執らしめた、二人友愛の厚きこと何に譬へんやうも無い、此床しき兄弟の心情をば暗に前の兩人をして壁越しに聴かしたのである、最初原被兩告の兄弟が室内に這入つた時は、各々憎

い怨めしいの一點張、顔見るさへも癩の種で、互に一方の隅に陣取つて内心睨み合の姿であつたが、次第に寒さは加はり監禁の苦さは増して、何うにも斯うにも我慢が出来かねて来た、相手はあれども敵味方、言葉を交はす情愛は無く、火鉢はあれども何のその、立寄るすべもなくばかり、搗て、加へて隣室にては心床しき兄弟が、互に兄よ弟と相愛くしみ相扶け、和氣藹々と過ぐる樂しさ、如何なればこそ我等兩人は、現在血を分けし同胞の、かく淺猿しき今の身上、草葉の影で父母が、嘸ぞかし我等を恨み玉はんと、心至り情切つて「是れ弟!寒くは無いか」「兄上!貴方も……」と互に火鉢に走り寄り、覺えず手を執つて泣いたのである、あはれ此時の涙は、

無言の判決と眞正の懺悔

實に兄弟二人が五臟六腑の奥底から絞り出されたのであつた、かくて多年の宿怨は頓に消滅し、俱に黨與に告げて訟を止め、爾後相倚り相扶けて一家大に榮えたとの事であるが、泉仲愛が無言の裁判に因つて、多年の疑獄が一朝に解決されたのも目出たき事ながら、又此兄弟二人が明判官の好き因縁に逢ふて、圖らず其身の不覺を慚愧し、發露懺悔の實を現はしたのも、誠に結構な事であると思ふ、其れゆゑ佛陀も「世に二つの妙法ありて世間を擁護す、慚と愧となり若此の二法なくんば世に父母、兄弟、妻子、知識、師長、尊卑を別たず、顛倒し渾亂して畜生の如くならん(雜阿含經)」と仰せられ、又承陽大師は「誠心を専らにして前佛に懺悔すべし、恚麼するとき前

佛懺悔の功德力を我を拯ひて清淨ならしむ、此功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり(修證義)」とお示し下されたのである。

其二十 カリホルニヤ沖の慘劇

佛陀四十二章經に「人愛欲を懷いて道を見ざるは、譬へば澄水の手もて之を攪せば、衆人共に臨むも其影を見る者なきが如し」と誠められ、「愛欲の垢盡くれば道見るべし」と示されたが、愛欲は其都てを五つに約めて常に五欲と云ふて居る、而して其五欲の隨一は財欲としてある、げに財欲の爲には昔も今も道を失ふ者が比々皆然りである、先年救世軍の大將ブースと云ふ人が來朝した時、其講演中に

斯う云ふ話を爲れた。

米國に或一人の労働者があつて、久しい間僻遠の鑛山に雇はれ、常に毒霧に襲はれ悪瓦斯を吸収しつゝ、殆ど生命を賭して立働いて居た、渠の眼中には唯だ黄金と云ふ目的の外何物もないのである、黄金が得たいばかりで懐かしい故郷も見捨てたのだ、慕はしい親族をも振捨てたのだ、否二つと無い命さへも場合に依ては捨てる覺悟であつたのだ、此の如き大決心を以て、一意専心労働に従事すること幾年、今や其人は目的を達して故郷に還る道すがら、緑色の空美しく波靜かなる大海原を、汽船に乗つて航海するのであつた、今しも甲板に立て四方を見渡した渠は「嘗て予が故園を出立せし時の希望は

カリホルニヤ沖の慘劇

正に此大海の如く大きかつたが、今復た歸へる我身の錦は今此空に榮ゆる緑色よりも美しくあらう、故郷の親族は如何なる喜悅を以て手を迎ふるか、朋友は如何に歓迎するか、將又故郷の山河は今後予に如何なる待遇を與ふるかと、萬感交々臻つて底止する所を知らなかつた、が、要するに得意の色は面に溢れて最と愉快げで有た、然るに何事ぞ、汽船は間もなくカリホルニヤの港に入らうとする矢先き、一天俄に掻き曇つた、ポツリ〜と大ひなる雨さへ落ちて風も之に加はるのであつた、乗客一同眉を顰むる間もなく烈風雨と變じた、波濤は怒つて起ち狂ふて倒れ、船は揺りあげ揺り下げられ、満目悽愴云はん方なき有様であつたが、不幸！汽船は暗礁に觸れて

見る／＼沈没の悲運に際會した、おはれ驚き叫ぶもの、泣いて訴ふるもの、船中一時に動揺めき渡つた、彼の労働者は己が生命にも比ふべき一封の黄金をば、シカと腰に結附けて甲板から、將に海中に飛込んで何れへか避難せんとした、此一刹那後の方に聲あつて「叔父さん！」と一聲高く叫ぶや否や、渠の腰にグツと抱きつき「妾も助けて頂戴なア」見れば優しき二八の少女、「オ、汝さん泳ぎを知つて居るかい」「イエ、存知ません、何うぞ後生ですから一處に連れて泳いで下さいッ」少女は血の涙を絞るのであつた、労働者は覺えず渠女を抱へんとしたが、不圖邪魔になつて氣が附いたのが腰の財布、ハツと驚く渠の眼は、一種異様に輝いて前後不覺に打仆れた、

カリホルニヤ沖の慘劇

渠は正しく血迷ふたのである、涙ながらに煩悶したのである、幾多の歲月を毒霧の中に送つたのは何が爲か、生命を的に立働いたは何が爲ぞ、唯だ此一封の黄金に焦心れたからである、さるを今此少女を助けんとせば、勢ひ此黄金を棄てねばならぬ、此黄金を全うせんには少女を見捨てねばならぬのである、嗚呼！黄金を棄つるか少女を殺すか、渠が迷ふたのは實に此處である、否世の多くの人々が迷ふのも、全く此處に外ならぬのである、渠は殊勝にも決心した、財布は惜氣もなく海に投られた、而して返す片手に少女を抱へて「サア女さん！シツカリ捕つてお在で」云ひつゝ、堅く身に少女を結び附けて、山なす怒濤の中にザンブとばかり飛び込んだ、が、渠の誠心

誠意は端なくも神佛の感應を得て、少女諸共無事海岸に打揚げられた。

其二十一 沈勇と客氣

有名なる劔客荒木又右衛門は、伊賀の國荒木村の人で、出身は農家であるが、柳生十兵衛や宮本無三四等に就て劔法の奥義を極めた、郡山の城主本多甲斐守に仕へて師範役を勤めて居た時、寛永十一年妻の弟數馬を扶けて、同藩河合又五郎を伊賀の上野に討ち、以て次弟源太夫の爲に仇を報ぜしめた事は、誰も能く知る所であるが、此又右衛門が未だ少年の頃であつた、或時同年輩の友達と烏籠山へ遊

獵に出掛けた、すると、兩人夢中になつて山中を驅廻つて居る中にとり／＼日が暮れて仕舞つたので、友達は「コリヤ困つた事になつたが、もと来た道を歸つては遠くて仕様が無いから、捷徑を行かうでは無いか」と云ひ出した、すると又右衛門「捷徑は好いが泥棒が出る」と云ふ事だから……」と云ふと、「そんな卑怯な話があるものか」と云つて友達は先に立つてツカ／＼出掛けた、闇い山中を稍暫く行くと、一人の怪しげなる壯夫があつて、今しも二人が攀ぢ登つて居る巖石の下に、雷のやうな大きな鼻息をかいて寐て居る、其處で友達は立止まつて「是れだ、泥棒が出る」と云ふのは……、併しコンナ奴はコッソリ行つて仕舞ふと、屹度後から追掛けて来るに

違ひない、だから一番勇氣を見せてやるが好い」と云つて、兩人で寐て居る壯者の顔へ小便を溺れかけた、壯夫は驚いて飛び起きた、見れば二人の青二才がまだ大きな奴を出して居ると云ふ始末、壯者も聊か面喰つたが、「イヤア小僧共の膽力には驚いた、中々見所のわる奴等ぢや、ドレ一處に行つてやらう」と云つて尾いて來た、凡そ二三里も歩いたがまだ離れない、斯う尾かれて見れば餘り氣持の好いものでも無い、されど友達は尙も度胸を見せやうと思ふてか、道々山姥の謠を歌ひ出した、が、最初の中こそ大きな聲で、而も朗かに節廻しさへも巧みであつたが、次第に聲が慄へて來て、終には能う揚げなくなつて仕舞つた、其處で壯夫は思はず吹出して、「イ

ヤ此小僧は客氣ばかりだ」と云ひつゝ、又右衛門を顧みて、貴公は中々落著て居る、其れが本統の沈勇と云ふものだ、吾輩が此處まで尾いて來たのは、貴公等の勇氣を試さうと思ふてだ」と云つて、別れて仕舞つたが、此壯夫は後に彼の由井正雪と刎頸の交際を結んだ、柴田三郎と云ふ者であつたとの事であるが、如何にも客氣と沈勇が一寸似ては居るものゝ其力は天地雲泥の相違である、して此沈勇が若し又眞の信仰から生じたのであつたならば、其勢力は又莫大なものであらう、六十華嚴經の中には「信の力は堅固なり壞ぶるべからず、信は永く一切の惡を除滅す」又「信は法門に於て障礙なく、八難を捨離して難なきを得しめ、信は能く衆の魔境を超出し、無上解

脱の道を示現せしむ」とある。

其二十二 高松城主清水宗治

「徒らに百歳生けらるは恨むべき日月なり悲むべき形骸なり、設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり（修證義）」實に人は一代名は末代で、千載の下儒夫をして起たしむる程の功績を残すにあらざれば、無量壽を獲得した大菩薩とは名けられないのである、今を距る三百二十九年、備中高松城に於て最と花々しき最後を遂げたる、城主清水宗治の如きは慥かに其一人であら

うと思ふ、文學士大町桂月氏は其著書に、かう云ふ意味に述べて居る。

天正十年に織田信長が西の方毛利を征伐に出掛けると云ふ噂が頻りに立つたので、流石に同家の片腕と頼まれ、日本一の智者と呼ばれた小早川隆景は、正月早々其衝に當つて居る諸城の主を呼で、此夏は信長が必ず攻めて来るであらうが、若し織田氏に心を寄する者があるならば、各々其心に任されよ、古より例のある事なれば聊かも遺恨には思はぬぞ」と申渡された、諸城の主此破天荒の一言に荒膽を抜れて、皆一同に二心なき事を誓つたので、さらば祝著至極に存ずる」とあつて、其れより山海の珍味を調へ大に饗應して、一同

に脇差一本づゝ與へたのであつた、諸城主喜び勇で押頂き、「この度の合戦味方の勝利疑ひ御座らぬ、毛利家の武運長久、如何にも目出たき事に存する」と、何れもドツと動揺めき渡つたが、席に列つたる清水宗治一人は嚴かに容を改めて、「方々の妄りに勝利を祝せらるゝこと、宗治以て合點參らぬ、今苟且にも信長來り向はゞ、其兵數十萬はあるべしと信ずる、然るに我々小城に據り僅な兵を以て防ぐとも、到底勝利あるべしとは思はれず、其時は城を枕に切腹するの外なし、其爲にこそ此脇差は下し置かれたるなれ、各々其覺悟して受けられよ」とて、三度まで押戴いて退いたのである、わはれ宗治は此時已に城に殉じて主家に酬いんと決心したのであつた、果し

高松城主清水宗治

て渠が覺悟した通り、三月に至て、豊臣秀吉は織田氏の先鋒の總大將として、八萬の大軍を率ゐて押寄せた、而して先づ高松城に使を遣はして、「貴殿が若し織田氏に味方し玉はゞ、事成就の曉には備中備後の二個國を與へ申さう」と言はしめた、されど死を決したる宗治が今更利に動かさるゝ理由はない、「御親切は忝ないが……」と云つて美事に刎ね附けた、刎ね附けられた秀吉は最早や血を以て城を贖ふより道は無い、高松城は平地であるが頗る堅固な城である、殊に之を守る者は中國無雙の名將で、死を鴻毛と輕んじ義を泰山と重んずる、清水宗治の事であるから容易に陥らうとは思はれない、五月七日秀吉は蛙ヶ鼻と云ふ山に陣を構へ、三里の間に堤を築いて

川を堰き止め、高松城を水攻めにしたので、流石の堅城鐵壁も滔々たる洪水に押し寄せられて、波は床に上り魚は籠に泳ぐと云ふ、いと苦しき籠城となつた、が、茲に建氣なるは宗治の兄月清と云ふ者である、月清は多年武者修行をして、廻り廻つて京都へ來ると弟宗治が秀吉に圍まれて苦んで居ると云ふ話を聞いたので、「名譽ある籠城ぢや、命にかへても助けにやならぬ」と云つて、急ぎ歸つて城に這入つた、兄弟雙ふて武士の本分を盡して、俱に死なふと覺悟したのであらう、けれども城兵僅かに五千、今や何らする事も出來ないのである、毛利方よりは輝元が大將となり、吉川元春と小早川隆景とが副將となつて、四萬の軍勢を率ゐて後詰に來たけれど、腑甲

高松城主清水宗治

妻なくも秀吉の兵を退くる事もならず、堤を壞す事も出來ないので、城中は益々困しむばかりである、ところが或夜宇喜多小二郎と云ふ者が、毛利氏の書面を持って密かに泳いで城に這入つた、而して其書狀を城主宗治に届けた、宗治披いて見れば、「我等後詰として來るは來たが、果敢くしい加勢をする事も出來ぬ、此上は何時まで籠城も難からうから、早く織田氏に降参して城内の兵を援けたが好からう」との意味であつた、去りながら宗治の決心は遂に動かなんだのである、けれども部下の兵を無慘く殺すに忍びぬから、終に一死を以て衆人の命を贖うと覺悟した、其覺悟を見届けた兄の月清は「御身を措いて我一人、何しに活きながらふべきぞ」と云つて、

同じく自殺する事となつた、すると今一人未近信賀と云ふ者も俱に自殺する事となつて、都合三人の命を以て衆に代る事となつたのである、他の諸將士も固より死を惜むにはあらねど、宗治は「茲に犬死せんよりは、後日大に毛利氏の爲に盡して死するが好い」とて許さなかつた、かく覺悟を定めた宗治は秀吉の陣に書を送つて、「永々の御對陣御苦勞千萬に存じ奉る、去りながら當城の運命も最早や旦夕に迫つた事であるから、我等兄弟と未近信賀の三名が、部下一同に代つて切腹仕るに依つて、あはれ寛仁の御君徳を以て、籠城の輩をば御救助下されたし、猶又明四日に切腹仕るゆゑ、小船一艘と美酒佳肴、聊か御恩賜に預りたい、これは日頃籠城の辛苦を忘れ、

高松城主清水宗治

老兵の疲勞を散ずる爲で御座る、何卒此旨御聞濟みを」と云ふ意味を述べた、すると其の返事は「御手紙の趣、筑前守へ申上た處が、各々方三名が衆に代つて切腹するから、籠城の諸人を助けて貰ひたいとの思召、一入深く相感じられた事であつた、就ては御希望に依つて小船一艘と酒肴十荷、並に上林極上三袋とを差上ます、これは明日檢使の者が持參致す事である、猶仰越しの外は縦令長男連枝たりとも切腹あるまじき旨申渡されたい」との意味であつた、斯様にして愈々談判は纏まつた、宗治が死に臨んで猶ほ美酒佳肴を求めたのは、餓え疲れた城中の將士を慰めんが爲である、斯て宗治は死後の事ども残る隈なく遺命して、早や暇乞の杯も濟んだから、童に命

じて髭を抜かしめた、幕下の者や毛利氏から加勢に來た人々の暇乞に來たのが此有様を見て、「かゝる場合に臨んで入らざる男振りの作りやう」と云ふから、宗治は「いやさう言はれな、某の首は後に信長公が實檢召さるであらう、此儘に髭を捨置かば、籠城の心遣りに忘却したかと、見る人毎に譏らるゝが口惜しいぞ」と答へられたが、其心掛けの綿密さ、あはれにも又床しい事である、明くれば六月四日、宗治の死ぬべき日は今日である、巳の刻には衣裳を改めて船に乗り數千人の號哭を後に漕ぎ出でたが、あはれや弘誓の舟ならなくて、恨みも深き死出の海、西は毛利の軍勢寂として聲なく、東は秀吉の陣、千成瓢箪は風にそよぐ、此中間は漫々たる大海原、中

高松城主清水宗治

に泛べる一葉の小舟、己を捨て、他を援はんとする、絶代の義士を載せて行くのである、四面の青山は愁を含み、魚龍も慘として躍らず、徒らに啣軋たる櫓の聲高く天地に響いて、船は次第に死地に近いた、恰も好し秀吉の陣よりは檢使として堀尾吉晴小船に乗つてやつて來た、而して約束の酒肴も贈られた、宗治は檢使に向て其勞を謝し末期の盃を廻しつゝ、聲高らかに誓願寺の舞曲を謠ひ出したので、月清信賀も之に和して謠つたが、あはれ最後に辭世の歌一首、「浮世をば今こそ渡れ武夫の、名を高松の苔に残して」之を名残り

に宗治先づ切腹し、月清も信賀も繼いで切腹したのであつた、されど風雲千年苔は蒸して殘墨を埋むるとも、英雄未死の魂は鎖すに

由なく、松風蘿月長へに物のあはれを語つて居る。

其二十三 白隠禪師の慈悲

「駿河に過ぎたるものが二つあり、一に富士山二には白隠」と俗謡にまで歌はれたる白隠禪師は、俗姓を長澤慧鶴と云つて矢張り駿河の生れであつた、最初同國松蔭寺の單巖和尚に謁して剃髪したが、後當時有名な宗格禪師や正受老人に就て證得する所があつて、其後再び故郷の松蔭寺に歸つて住せられたが、神機獨妙禪師と云ふ勅諡を賜はつた程の名僧知識であるから、歸依の善男善女も實に夥しかつた、鳥渡其頃の事である、原宿の商人某なる者が深く禪師に

歸依して、恰も生佛の様に尊敬して居た、其れゆゑ某は屢々松蔭寺をも訪づれ、また度々我家へも禪師を請して供養おさへ、怠りなかつたが、此商人某に一人の娘があつて、偶々下男と密通して遂に不義の胤を宿し、一子を産み落したのである、ところが元來正直一途なる商人は烈火の如くに怒つて、「己れッ家名を汚す憎き奴、相手は誰ぞ何時からぞ」と嚴しく娘を叱責したので、餘りの權幕に流石の娘も辟易して、下男と不義したなどと云ふたらば、自と家名に傷もつき、如何なる父の怒りを構ふも知れず、又其れが爲め折角産落した此子さへ、手元で育つる事も出来ぬ様にならば、如何程悲んでも取返しは附かぬと、女心の一筋に迷ひ迷ふた其結果、不圖思

ひ當つたのが白隠禪師の事、禪師は父が日頃の歸依であるから、今禪師の御胤を宿したと云は、左まで家名に傷もつかず、父の怒りも解けるであらうと、淺墓にも詐つて涙ながらに、「彼の禪師様と、

」と答えた、すると商人は益々怒つて娘の手から赤ン坊を振ぎ取つて一目散に松蔭寺へ驅附け、イキナリ方丈へ踏込んで「此賣僧奴、腥坊主奴、よつくも人の娘を傷者にし、剩さへ家名に泥を塗つた、かゝる坊主とは露知らず、是れまで禪師の名僧のと、崇め尊んだのが口惜しいわ」と散々悪口雜言して、小供を禪師の膝に擲げつけて我家へ還つて仕舞つた、藪から棒の此騒ぎに禪師も聊か當惑したが、大方父無し兒の所置に困つて、我れに塗りつけるならんと、深くも

白隠禪師の慈悲

情を察したる禪師は、商人に對して一言の争ひも爲なかつたが、今又膝に捨てられて、張裂けんばかりに泣叫ぶ赤兒を見ては、何條以て堪るべき、ヤヲラ法衣の袖に抱き上げて、「オ、いとしの者よ綠兒よ、因縁とは云ひながら、東西別たぬ其内に、産みの親にも引分けられ、浮世捨てたる我手に棄てられ、かゝる憂目を見ると云ふも、皆是れ前世の約束ぞや、淋しからうが是れ綠兒！ 暫し假寝の我が懐ろ、眠んで呉れよ可愛の者！」と、馴れぬ兩手に揺りつゝ、禪師が綾す慈悲の御心、乳房離れし綠兒も厚き情けに絆されてか、いつかスヤ／＼眠る様子に、「あはれさよ夜半に捨兒の泣きやむは、母が添乳の夢や見るらん」との古歌も偲ばれて、一層憐れを催ふされた

のである、其れより毎日我子の如くに慈んで、すぎ洗濯は云ふに及ばず、大小便の掃除までも一々叮嚀に致されたが、第一困つたのは貰乳、さりとて外に與ふるものもなければ、餘儀なく近所近邊を抱廻はつて、誰あらう天下の名僧知識が、一口二口の乳を貰ひ歩くのであつた、心なき者どもは白隠が不義密通して、彼の有様は何事ぞと罵り合ふも多かつたが、禪師は一向氣にも掛け玉はで、たいく小供の發育ばかりに餘念は無かつた、話變つて此兒の母は可愛の縁兒を奪ひ取られ、男世帯のお寺に捨てられたと聞いて、身も世もあられず歎いた事である、今頃は何うして居るであらうか、禪師様は如何にお育て下さるか、此寒空に乳に離れて嘸ぞ泣いてばかり

居るであらう、禪師様にも定めてお困り遊ばさう、嗚呼濟まぬ事を致して退けたと、明暮れ案じ煩はぬ日は無つたが、鳥渡其年の冬のこと、一日大雪が降つて見渡す限りの銀世界、今日も我子を案じ煩ふて肌刺す寒風も厭ひなく、卍字巴と降る雪を、涙ながらに見て居ると、遙か彼方の雪道をトボトボと辿る出家がある、げに「雪は鷲毛に似て飛で散亂し、人は鶴氈を着て起て徘徊す」と云ふ有様、如何なればこそ此大雪に、何用あつての道中ぞと、よくよく凝視て居たところが、此はそも如何に痛ましや、白隠禪師は此中を赤兒を抱えて托鉢の體、かくと見るより母親は狂氣の如くに轉び出で、「ア、モシ妾が悪う御座いました、何うぞお赦し下さいませ」と禪師の足下

にひれ伏した、而して大に其罪を詫びたのである、禪師は豫てさも
 あらんと御承知の事ゆゑ、別に驚きもし玉はなんだが、娘は思ひあ
 まつて遂に其實を父に告げたので、父は頗る驚いて只管禪師に詫入
 つたから、禪師も「此子の父親が知れたなら、こんな目出たい事は
 無い」と言つて、喜んで赤兒を返されたも云ふが、今吾々も禪師の
 如く一切衆生に對して「猶如赤子」の慈念を貯へる事が出来たらば
 其れこそ眞實の大菩薩である。

(注意、これは無難和尚の逸事だとも、亦一休和尚の逸話だとも云ふ者あれど、如何にや)

其二十四 曾呂利新左衛門の諷諫

新左衛門は和泉の人で本姓を杉本(或は坂内と云ひ中川とも云ふ)と
 云つたが、元來茶事和歌に堪能なばかりでなく、刀鞘を作るにも餘
 程妙を得て居たと云ふ事で、其れが爲め姓を曾呂利と云ふたのださ
 うな、豊臣秀吉は其滑稽洒落を愛して常に左右に侍せしめたのであ
 るが、渠が慶長八年に重患に罹て最早や一命覺束ないと云ふ時、
 秀吉上使を賜ふて「何か死後の希望は無いか」と問はせられたれば、
 新左衛門取敢えず「御威光で三千世界手に入らば、極樂浄土我に賜
 はれ」と答へ、又「冥土に在ます御一門中へ、御手紙でも差遣はさ
 る、ならば、片便りではあります、慥かにお届け申ますから、左
 様上聞に達して頂きたい」と云ふた程の滑稽家である、秀吉公或時

曾呂利新左衛門の諷諫

御微行で唯一人何處へかお越しなさらうとしたから、近臣の者が寄集つて之を諫められたけれどもお聞入が無い、其處で之れは曾呂利で無くば仕方があるまいとて、新左衛門に諫奏を命じた、すると曾呂利は直に御殿に参つて豊公に見え、座に俯伏してカッ、と苦しげな聲を出して居るから、秀吉公大に怪まれ、「新左衛門！ 何うした」とお仰つた、すると「ハイ、外では御座いませんが、私はチと怪しげな物を食しまして、大層胸苦う御座いますから、此處で嘔かうと思ふので御座います」「さうか、其れは悪いが、一體何を喰べたのか」「實は斯うで御座います、先日臣が北山へ遊びに行きましたらば、一匹の大きな鬼が出て参りました、左様さ身の丈は一丈餘りも有り

ましたらう、形容は人間の様で翼がありました、鼻の長さで申したら二三尺もある位、能く世間で云ふ天狗の類で御座いませう、其天狗が突然臣に攫みかゝらうと致します故、大に驚いて逃ださうと爲ましたが然らうならず、餘儀なく臣が尋ねて見た、全體汝には翻身の術があると聞いて居るが、何うか一度観せて貰ひたい、其れを冥土の土産に汝の餌食とならうわえと、斯う申しましたらば、其れは足下の望み次第と云ふから、其れならば、汝の魁偉な姿は今観る通りだが、出来るだけ眇さな姿を現はして、臣に観せて貰ひたいと云ひましたら、倏ち姿が消えて失くなり、今度は小さな蟻のやうな物になりました、臣の掌の上に止りましたから、是れ幸ひと一口に吞

曾呂利新左衛門の諷諫

込で、急いで我家へ歸りましたが、元來天狗と云ふ奴は神の獸と聞いて居ますが、ナンボ神の獸でも一度其威光を失ひますと、圖らず人間の食物とならねばならぬ、然なくば臣は今頃は奴の胃の腑に葬られて居るのです」と申上た、しますると、豊公圖らず吹出されて「誰に頼まれたかッ」とお仰つて、遂に微行を止められたと云ふ事である、曾呂利の如きは終身洒落を以て終つた人間であるが、渠が戯論の中に不戯論の妙味を備へて、常に其本心を達して居たのは實に感心である。

其二十五 大久保彦左衛門の不詔諛

徳川三代の將軍に歴仕して常に大議に參與し、硬直と奇行とを以て世に響いたる彦左衛門忠教は、幼名を忠雄と云つて代々三河の大久保に居た、其れゆゑ大久保を以て姓としたのであるが、天性硬直なる上に且つ寡欲なる彦左衛門は、常に權門貴族を睥睨して物の數とも思つて居ない故、當時幕府の制度として執政官は、將軍を輔佐し内外の機務を總ぶる重職にて其權勢亦飛ぶ鳥を落す程なるにも拘らず、彦左衛門は一度も其門を見舞ふた事が無い、餘り驕慢無禮であるといふので、執政の一人なる松平信綱と云ふ者が、監察秋山正重に命じて大久保を諷刺せしめた、其處で秋山は彦左衛門に向つて「翁が將軍家の優遇を蒙つて居ることは、天下の俱に知つて居る所

大久保彦左衛門の不詔諛

で、敢て禮儀作法を質す譯ではないが、併し執政は上に代つて政令を行ふ者であれば、之を敬ふのは即ち上を敬ふ道理であるから、官に在るものは皆執政の門に伺候しない者は無いのである、然るに翁も年老いたりとは云へ、朝に列せらるゝ以上は時々執政を訪づれて互に意志の疏通を圖つて頂かねば、上に對しても失禮では御座らぬか」と詰つた、すると大久保は拔らぬ顔をして「イヤ拙者も斯くは存ずる所なれど、併し拙者が參れば先方も亦お越しなさるゝ、コリヤ是れ禮儀の常と申すもの、左すれば徒らに御手敷を掛くるも氣の毒又二には世の權門に媚び諛ふ者どもは、争ひ競ふて珍奇の品を獻ずるが、拙者從來貧乏で、貧乏屋敷の名を取つた程ゆゑ、天下の珍品

を調へて献上に及ぶと云ふ様な、ソんな事は出来ぬゆゑ、わざ／＼控へて居たなれど、折角貴殿が誨へらるゝに、之を用ゐぬと云ふ譯にも行くまい、宜う御座る、近日一度伺ひませう」と承諾したが、彦左衛門謂ふには、多分是れは信綱の差金だらうと、取敢へす泥葺二三十本を苞に入れて、一人の奴僕に背負して、先づ信綱の邸へ行つて玄關口で「大久保彦左衛門お詣ひに參つた、したが貧乏人の事であるから氣の利いた物は持て來られない、龜末だが葺葉少々持參した」と大きな聲で怒鳴つて、上り階へドシンと置いたから堪らな

い、あたり一面泥だらけ、取次に出た者は驚いたの驚かないのぢや無い、飛んだ狂人が舞込んだと思つて中々取次いで呉れない、する

と彦左衛門「かう云ふ御威勢のお邸へは、日々珍らしいもの計り集るから、貧乏人の青なんぞは取るに足るまい、貴公等取次いで呉れなげや其れで好い、無理に貰つて呉れとは頼まぬ」云ひつゝ、大久保は皆集めて、持て歸つて仕舞つた、其れから又他の執政の邸へ行つて同じやうに演つけた、而して最後に初め忠告して呉れた正重の宅へ行つて、「先般貴殿が御親切に教へて呉れたから、仰せ通りに諸公の邸へ參つて聊か賄賂を進呈したが、誰も受けては呉れぬ故致方なく持て來た、何うか貴殿貰つて呉れ」と、其處へ置いてサツサと行つて仕舞つた其後執政官が公堂に集つた時、フと此話が出て一同大笑ひをしたとの事であるが、彦左衛門の行爲は勿論極端過ぎては居

るものゝ、併し權門高貴に媚びぬ所に自ら高潔なる氣概が具つて居て、實に面白いと思ふ、佛陀も遺教經に「諂曲の心は道と相違す、此故に宜しく其心を質直にすべし」と誡められた。

其二十六 末利夫人の持戒

梵網經に「一切の酒酤ることを得ず、若し自身の手より酒器を過して、人に與へて酒を飲ましめば五百世手なからん」とあり、善惡所起經には飲酒の三十六過を擧げて居る、「一には資財散失し、二には現に疾病多く、三には鬪諍を興す、四には殺害を増長す、五には瞋恚を増長す、六には多く意を遂げず、七には智慧漸く寡く、八に

一五二
 は福德勝らず、九には福德轉た減ず、十には秘密を顯露す、十一には事業成らず、十二には多く憂苦を増す、十三には諸根闇昧なり、十四には父母を毀辱す、十五には沙門を敬せず、十六には婆羅門を信ぜず、十七には佛を尊敬せず、十八には僧法を敬せず、十九には悪友に親近す、二十には善友を捨離す。二十一には飲食を棄捨す、二十二には形穩密ならず、二十三には淫欲熾盛なり、二十四には衆人悦ばず、二十五には多く語笑を増す、二十六には父母悦ばず、二十七には眷屬嫌棄す、二十八には非法を受持す、二十九には正法を遠離す、三十には賢善を敬せず、三十一には過非を違犯す、三十二には圓寂を遠離す、三十三には顛狂轉た増す、三十四には心身散亂

す、三十五には惡放逸をなす、三十六には身謝し命終つて大地獄に墮す」と云ふのである、殊に我宗にては十重禁戒の一として。盡未來際能く持たねばならぬ戒法であるから、特に深く研究する必要がある、併し頑固に流れては却て其精神を失ふ事になる。
 昔天竺の波斯匿王妃たる末利夫人と云ふは、釋尊より不酤酒戒の戒法を受けて居たが、或時大王が多くの供奉員を引連れて山野に遊獵せられた際、王は興に乗じて正午を過ぐるも猶獵を止めさせ玉はぬ、然るに此日は午前半日の計畫であつたから、大膳職の者も午餐の用意を爲て置かなかつた、ところが突然王は辨當を命じられたので、供奉の者は俄かに使を遣はして御料理を奉るやうと申入れた、あ

まり急遽の事であるから係の人々も大に閉口して、餘義なく「御内命なきゆゑ調理し難い」と答へた、使者も止む事を得ず山へ還つて

此旨を大王に奏上すると、王は赫と怒られて其者を死刑に處せよと

命ぜられたのである、時に末利夫人は此由を聞食されて、かゝる忠

實なる者を斯ばかりの事で殺すは不憫ぢやと思召され、早速夫人自

ら紅粉盛粧を凝らし、且多くの侍女をも召連られて、美酒佳肴を齎

らして急いで山に行き、大王に獻じて御意を伺ひ、嗚伽の聲に綾羅

の袖、謠ひつ舞ひつ御機嫌を取つたので、王の怒も忽ち消え、酒に

飢を忘れて打ち怡ばれ、愉々快々の裡に還御あらせられたのである、

かくて其日は濟みましたが、翌日になると王の顔色が頗る優れさ

せないの、夫人も心ならず其由を問はせられたらば、大王いと御後悔の體にて「朕は昨日一時の憤怒より無二の忠臣を亡きものにせしが、願へば不憫の至りであつた」とて、涙さへ眼に浮べさせらるゝいとほしさ、夫人は恭々しく大王に向て「願くは妾の罪をお免し下さいます、妾は昨日王の御命令を枉げて、渠を他へ隠くし置きました、如何にも死刑に處するが不憫さに、機を見て御赦免を願ふ妾の所存、何うぞ御免しが願ひたい」と、事の仔細を申上て平にお詫を入れた所が、大王は大に御嘉納あらせられて、夫人の功を賞賛し玉ふたのであつたが、佛陀も此由を聞召されて、末利夫人は不酤酒戒を犯したるが如くなれども決して破戒の罪にはならぬ、全く菩薩

の慈悲心より出でたる取計らひにて、眞實受戒の善巧方便に當る故其功德廣大なりと仰せられた(摩訶止觀)此等が所謂戒遮持犯の極意である。

其二十七

晉豫讓の孤忠

知恩報徳は人道の大本であり、佛敎道德の本旨であつて、吾等の一日も缺くべからざる道である事は云ふまでも無い、其れゆゑ佛陀も心地觀經の中に報恩品と云ふ項目を特に設けられて、恩に關する御説明を縷々數萬言に亙つて述べられた事であるが、智度論にも「恩を知るは大悲の本なり、善業を開くの初門なり」とあつて、古來此

種の教は中々完備して居るが、其れに反して實踐躬行者の尠ないのは實に遺憾である。

彼の有名なる晉の豫讓は其主智伯に事へて最も忠勤を抽んでた、尤も智伯も頗る賢者であつて能く豫讓の爲人を知つて、深く愛し重用したからでもある、一とせ智伯は兵を擧げて趙の襄子を討つたが、趙は力及ばずと見て取つて直に韓魏二ヶ國と聯合して之に當つた、三國の聯合軍を相手にした智伯は衆寡敵せずしてア、ハ、ニ、ハに亡され國は三國に分取りされた、然るに當の敵たる趙襄子は猶飽きたらで、智伯を憎む事は夥しく、渠の頭蓋骨に漆を塗つて酒杯と爲た程であつた、斯様な有様であるから其臣豫讓も一旦遁れて山奥深く潛ん

で居たが、如何にしても主の仇を報じ日頃の恩義に報いんものと観念して、遂に己が姓名を變じ身は賤しき職人となつて趙襄子の宮中に入込んだ、而して御殿の廁を塗つて居たのである、かゝる事とは露知らぬ襄子は何心なく廁に下つたが、如何にも胸の慟季激しくて何か事ありげに感じられたゆゑ、怪んで廁の職人を吟味した、すると豫讓は素直に名乗つて出て、「予は智伯の爲に仇を報せんとするのである」と云つて、隠し持つたる短刀を前に置いた、襄子の近侍の者は大に怒つて豫讓を殺さうとしたが、襄子之を遮つて「渠は義人である、予は殺すに忍びない、主亡びて其臣仇を報せんとするは實に尤もである」と云つて、許して追ひ放つたのである、然るに豫讓

は猶も屈せずして第二の計畫を廻らした、渠は取敢へず身に漆を塗つて癩病患者のやうになり、石灰を呑んで聲を潰し、形容一變して乞食の群に這入り、密かに趙襄子を狙つて居た、其姿は現在二世の契りの女房さへも、我が良人とは見知らぬ程であつた、すると一日襄子が外出すると云ふ噂を聞いて、豫讓は時節到來と打喜び、襄子の過ぐる橋の下に待伏した、果して襄子は其橋を通りかゝつたが、馬俄かに驚いて一步も通まないで、襄子は「必ず豫讓が何れにか潜めるならん」として、近侍の者をしてあたりを搜索せしめたらば、案に違はず、姿こそ非常に變り果てたれ、まがふ方なき豫讓が橋下に伏して居たから、早速捕へて襄子の前に引出した、引出され

たる豫讓の心中如何であつたらう、渠は一度ならず二度までも此失敗を重ねたのだ、天は何故にかくまで襄子に厚く豫讓に薄きか、切齒扼腕、悲憤の涙にくれて控へたる豫讓に向つて趙襄子は「汝が智伯の爲に盡さんとせし事は其名已に成つた譯である、して予が義士を待つに寛恕を加へた事も已に充分であらう、スリヤ此度は汝も聊か考えねばなるまい、其代り言ひおく事あらば何なりと申残せ」と云ふたれば、豫讓は涙ながらに「今日のこと固より死は期する所、今更何の希望もなければ、御言葉に甘へて一のお願ひ、外でも御座りませぬが、豫て亡君の仇を報せんと、一度ならず二度までも、君を狙ふて其意を果さず、此儘ヤミ／＼手討に逢はゞ、草葉の影で亡

君に、何と申譯を仕らう、あはれお慈悲を持ちまして、君の召物唯だ一枚、お貸し下さる事ならば、生々世々の御鴻恩、拙者はせめて其許の衣服なりとも引破り、恨みを晴して相果てん。こればツカリが臨終の願ひ」と申述べたところか、趙襄子も其心根に同情して、衣服一枚貸與へられたれば、豫讓は喜び勇んで立上り、所持せる劔を抜き放ち三たび其衣を撃つて「草葉の影の亡君に、いで物語らう」と、即座に其劔に伏して自殺を遂げたから、有合ふ人々皆感涙に咽んだとの事であるが、豫讓の苦忠は實に末世の好き鑑である、義經千本櫻の芝居で、維盛彌助の科白に「晋の豫讓は衣を裂く」とあるのは此事である。

其二十八

漢蘇武の持節

前漢の忠臣蘇武と云へる者は杜陵の人で、字を子卿と云つて居たが、天漢元年に武帝の命を奉じて副使張勝等と共に節を持して匈奴に使した、節と云ふのは天子の使命を帯た使者の資格を證明する爲の品である、而して其使命を全うして將に漢に歸らうとする矢先に當て、虞常と云ふ者が副使の張勝にも打明けて、匈奴單于(王)の母を奪ひ又前に降參した衛律をも殺さうと企た陰謀が露顯した、すると單于は烈火の如くに怒つて、漢の使者を塵にしやうとしたが、臣下の者が「殺さずして降參させたが宜からう」と諫たので、前の降

參者たる衛律に命じて蘇武に説かしたためたのである、すると蘇武は衛律に向て「かく節を屈し命を辱しめし止は、何の面目あつて漢に歸らうや」と云つて、佩刀を抜く手も見せず即座に自刃した、衛律は大に驚いて醫者よ薬よと、大騒ぎをしたが、其甲斐あつて程經て蘇武は蘇生したのである、然るに虞常は陰謀の罪に因つて已に殺されて仕舞つたが、衛律は今度は張勝に向つて「汝も最早や殺されるであらう、併し早く降參すれば一命は助かるぞ」と云ひながら劔を抜いて打うとした、すると張勝は青くなつて直に降參をした、其處で衛律は復もや蘇武を打たうとしたが、蘇武は一向に驚く氣色も見へないので、俄かに言葉を和げて「拙者は前に漢に背いて匈奴に降

つたが、其お蔭には活計歡樂は心のまゝだ、足下も早く降参せば
 富貴榮達は希望次第、何と然うしては如何ぢや」と勧めたけれど、
 蘇武は返答も爲ないので、衛律は猶も言葉を繼いで「今拙者の云ふ
 事を用ゐなければ、後日再び拙者に見ゆる事も出来ないぞ、能く考
 へて見るが好い」と云つたらば、蘇武は怒の髪逆立て「貴様は漢の
 恩を受けながら、蠻夷に降る人非人、何しに貴様のやうな奴に見え
 んや、見るも汚はしいわッ」と怒鳴つたので、流石に衛律も其語氣
 に僻易したが、匈奴の王はますます蘇武の人物を惜んで、何とかし
 て之を降さうと、今度は土牢の中へ入れて飲食も與へずに苦めた、
 ところが天此義士を憐んでか一日六花粉々として降つたのである、

漢蘇武の持節

其處で蘇武は大に力を得て、是れ全く天の恵みと降積む雪を押戴き
 之に己が座の敷物の毛を交せて食して居た、此の如くすること數日
 に及んだが、蘇武の運命強くして餓死するに至らなんだ、かゝる有
 様であるから匈奴も困り果て、次には沖を遙かなる一孤島に流し
 て、日々牡羊を飼はしめた、而して若此の牡羊が兒を産む時節が來
 たならば赦してやらうと云ふたとの事である、此度も飲食は固より
 與へられないのであるから、蘇武は詮方なしに野の鼠や草の根を食
 して、辛くも生命を繋いで居た、かゝる苦しい間にも漢より賜はつ
 た節は肌身離さず、羊を飼ふにも始終持つて居た、其れゆゑ節に附
 いて居る毛は悉く脱落ちたけれども、其れでも蘇武の節義は決し

て枉げなごだ、其後漢の將李陵と云ふ者匈奴と戰つて破れ、之も亦降參したのであつた、其處で匈奴の王は復もや李陵をして蘇武に説かしめたのである、李陵蘇武を訪れて「足下はかゝる無人の境に苦んで、獨り節義を全うせられても、足下の節義は到底世に現はれるものでは御座らぬ、殊に陛下は賞罰常なき御方で、是れまでと雖も罪なくして滅された者は、其數幾十なるを知らないのである、陛下已に此の如き有様であるのに、足下は抑も誰が爲に其苦節を守らるゝのであるか」と詰つた所が、蘇武嚴然として答ふるに「我等父子さまでの功なくして陛下の寵を得、兄弟親近に至るまで皆重く用ゐられた事である、其れ故我等は常に肝腦を地に塗みらしても、陛下

漢蘇武の持節

の爲に盡さうと願ふて居るのである、今身を殺して其功を樹つる事が出来るならば、立るに誅戮せらるゝとも決して恨みとは存じ申さぬ、臣の君に事ふることは恰も子の父に事ふるが如くであれば、子たる者の父の爲に死するは固より甘んずる所であるから、決して最ら其様な事は云ひ玉ふな」と云つて従はなんだ、餘儀なく李陵も別れを告げたが、其後再び訪問して武帝の崩御せられた事を告げた時には、蘇武は氣も狂はんばかりに驚いて、南に向て號哭して、數月の間は血を吐いて泣き通したと云ふ事である、かくて昭帝と云ふ天子が位に即いて匈奴と和睦を結んだので、使者を匈奴に遣はした時、蘇武を歸へして呉れと言はしめたらば、匈奴が詐つて蘇武は已に死

んだと云ふから、使者は眞實と思ふて居ると、蘇武の部下であつた常惠と云ふ者が、其れは虚偽であるから、斯う云ふ風に云つて匈奴を掛けて御覽なさい、殊によつたら白状するかも知れぬからと云つて、使者に教へたのが斯うであつた、天子が一日御苑の中で雁を射玉ふた所が、其雁の足に一本の手紙が着いて居たゆゑ、早速抜いて見らるゝと、是れ即ち蘇武の筆蹟にて、或澤の中に在ると記してあつた、スリヤ已に死だとは正しく詐り、何れにか生らへ居るであらうから、是非歸して貰ひたい、使者は此通りを匈奴に訴へたところ、匈奴は計られたとは露知らずして、終に蘇武を返したのであつた、後世雁の玉章と云ふ事を云ふのは、正しく此故事から出たも

のである、かく臥薪嘗炭の思ひをなして匈奴に捕はるゝこと十九年、遂に節義を貫き得たる蘇武の精神は、彼の晋の豫讓にも似て、知恩報徳の好一對であると思ふ。

其二十九 少女宿瘤の心操

古の女大學には「女は容よりも心の勝れるを善とすべし、心緒美なき女は心騒しく眼恐ろしく見出して人を怒り、言葉旬かに物言さがなく口齟て、人に先立ち人を恨み嫉み我身に誇り、人を誇り笑ひ我人に勝貌なるは皆女の道に違へるなり、女は只和に隨ひて貞信に、情ふかく静なるを淑とす」とあるが、玉耶經にも「女人の法

は容顏の端正なるを以て美人と名けず、心行端正にして人に愛敬せらるゝ、之を眞の美人とす」とある通りで、兎かく女人は人に愛され且つ敬はるゝ所の徳を備へるのが肝要である。

昔支那に宿瘤と云ふ醜き少女があつた、此少女は頸に大きな瘤があつたとかで、人々が宿瘤とくと呼だのださうな、或時宿瘤が畑に出で、桑を摘んで居たところ、偶々齊の閔王が何處へか御臨啓と云ふので多くの従者を率ゐて附近の道路を御通行になつた、すると田畑に耕作する老若男女等は何れも皆鋤を捨て鋤を擲つて、先を争ふて拜觀に出たのである、然るに宿瘤一人は脇目も振らず一生懸命に桑を摘んで居るから、不圖國王が見認められて不審に思召し、左右の

少女宿瘤の心操

者を顧みて其所以を問はしめられた、其處で従者の一人は早速宿瘤の側へ立寄つて「なぜ其許は王様の御行列を拜まないのか、數多の農夫等は皆競ふて出て居るに」と仰せらるゝと、宿瘤は恭々しく會釋して「妾は桑を摘めと父母に命じられましたが、王様の御行列を拜觀せよとは云ひつかりませんでしたので」と申上た、流石の従者も此一言に驚いて、直に閔王に此旨を奏上すると、玉も非常に御感動あらせられて、竟に引上げて御自身の妃と定められたが、かゝる賢き夫人が大に王の政を輔けたので、爲に國內が能く治つたのみならず、齊が韓魏趙の三晉を侵し、秦楚の二強を懼れしめたのも、皆此夫人の力が大に與つて居たと云ふ事である、何れの國の

王様にせよ、偶然の途上にも臣民各々先を争ふて拜觀せんことを希ひ、天地も崩れんばかりに萬歳を歡呼するに逢はせられては、自ら臣民の至情も忍ばれて、新しき領土を得させらるゝよりも尙御愉快に渡らせらるゝであらう、去りながら堅く父母の命を守つて、寸秒の時間も空しく送らず「忠實業に服し勤儉産を治むる」至誠を御覽じられては、又一種云ふべからざる御愉快を感じさせらるゝに違ひない、宿瘤が此國王の御歡感を忝うしたのも此處であらうと思ふ、井戸端會議の議員共は宜しく愧死すべきである。

其三十一 十返舎一九と蜀山人

蜀山人は幕府の士族で通稱を七左衛門と云ふて居たが、本名は太田覃で、字を南畝又は子耕などと云ふて居た、其外に別號も澤山あるが蜀山人と稱へ出したのは、草書で四方山人と書いてあつたのを或人が蜀山人と讀み違へたから、遂に其通りに改めたと云ふことである、性學を好み又文章を善くしたが、終身放浪自恣の生活を喜び、狂歌狂文を以て一世を嘲笑して居た、又十返舎一九は駿府の生れで本名を重田貞一と云ひ、醉齋と號したが、更に戲號を一九と稱へたのである、嘗て大阪にて近松余七と名乗り淨瑠璃を作つたが、寛政六年江戸に出て滑稽小説を以て鳴つた人である、此十返舎一九と蜀山人、即ち奇人と奇人とが初對面をした時の話が中々振つて居る、

此兩人が豫て雙方共に名は知り合つて居たが、未だ一度も對面する機會が無つた、が、一日十返舎一九の方から蜀山人を訪問した、一
 九蜀山の門に到つて名刺を通じて主人に面會を求めた、すると取次
 の者が其名刺を以て奥へ這入つたまゝ、待てど暮せど出て來ない、
 あまりの事に一九も呆れ返つて、腹立しさの餘り「蜀山人は何うし
 たツ、驕然と構へるにも程があるツ」と怒鳴つて置いて、フイと歸
 つて仕舞つた、其後二三日を経て偶然途中で蜀山人に邂逅したから
 一九取敢へず「先生！過日は何で彼のように拙者をお待しめされた、
 實に拙者は閉口しました」と挨拶すると、蜀山人の言草が面白い、
 「イヤさう仰せられな、貴殿こそ何故拙者を愚弄めされた、實に拙

者も進退谷りました」と云ふから、一九も怪んで其理由を聞いて見
 ると、蜀山人の云ふ事には「拙者貴殿の芳名を聞くことは随分久し
 いものだ、疾うからは是非一度面談したいと心掛けて居たが、其機會が
 無いので遂ひ其意を果さなんだ、然るに幸ひにも貴殿の方からお尋
 ね下されたので、大に喜んで、今日こそ緩くり快飲うと存じたが、
 生憎素寒貧の一文無し、お酒を買ふ事が出來ないと思召せ、仕方が
 無いから庭の桐の木一本切倒して、早速下駄屋へ賣飛ばして幾何か
 のお錢を取つて、歸りに酒を求めて來いと、僕に命じて、やうく
 の事に支度が調ふたら、貴殿は疾くに歸つて仕舞はれて、影も形も
 見へないと云ふ始末さ、何と馬鹿くしいぢや無いか、人を愚弄す

るにも程があるとは此處の事さ」聞いて流石の一九も吹き出し、以前の恨みも消えて跟なく、俱に笑つて別れたと云ふが、無我無欲の境界には中々凡人の及ばぬ妙味がある。

其三十一 頼山陽の識見

頼山陽は名は襄、字は子成、通稱久太郎、別に三十六峯外史と號して居た、出生は大阪であるが寛政十二年父春水の怒に觸れて廢嫡せられ、幽室に屏居して彼の日本外史を著はしたとの事である、先生が一世の碩儒であつて、又能書家であることは誰も能く知る所であるが、其識見の高かつた事は又絶倫と申しても好いのである、其れ

頼山陽の識見

に就いて三宅青軒氏の著書には斯う云ふ話が載つて居る。先生が京都三本木の水西莊で筆を驅つて、何やら著述に餘念なき折から書生の何某が来て「先生」と呼ぶから「何か用か」と振向くと「日野大納言資愛殿からお使者が参りまして、明日都下の儒者や文人等を集めて、聊か酒宴を催したいから先生にも御出席が願ひたいと申しますが……」と聞て、山陽ジロリと書生を見やり「思召は難有う存じますけれど、参殿は出来兼ねるとお断り申せ」是れだけならば仔細は無つたが、先生止せば好いのに獨言「米搗蟲見るやうにペコペコ頭ばかり下げる、御辭儀上手の奴等が定めて多勢行くであらう、此方等には其んな事は出来ぬワ」と云つたのが、固より狭い家の事

であるから使者の耳に這入つた、サア大變、使者は大に腹を立て、
 邸へ歸り、早速其趣を大納言卿に申上たところか、日野大納言は
 公卿に似合ぬ奇人であるから「さうか、山陽が其んな事を云たか、
 中々面白い男だ、何うかして呼びたいものだ」と仰せられて、御立
 腹どころか猶惚込んで、手を換へ品を換へて招くと云ふ始末、けれ
 ど、山陽も中々強情でウンと云は無、ウンと云はねば云はぬ程此
 方でも云はしたくなる、と云ふ有様で、使者を向けること四度に及ん
 だ、流石の山陽も之には呆れて「さて、日野殿は氣の長いお方だ、
 これでは所詮行かざるまい、行く限りには少々注文がある、お
 使者の方を此方へお通し申せ私が直々にお話し仕様」とお仰るから、

書生は直様使者を案内して山陽に引合せた、山陽先生軽く會釋して
 「先日より度々のお使ひ御苦勞千萬、拙者の如きものを斯程まで御懇
 望に預る段、實に難有う存じますれば、如何にも參殿仕りませう、
 去りながら參殿仕るに就いては一通り拙者の希望が御座る、さて
 其希望と申すは何分田舎育ちの無作法者、社袷着けて扇子をバチの
 かし、始終「ハイ、ハイ」で持切り、自由な足を持ちながら歩く
 事も出来ず、膝行とか云つて膝を疊にすりつけ、スルリと向へすべ
 り寄るとき、向脛を磨削いて痛んでも、へ、と追縦笑いで紛らか
 し、内密で顔を顰めるなどは云ふに及はず、奇調奇面に坐り込で、
 足に痺が切れても我慢をし、欠伸も耐へ咳も耐へ、間さへあればお

辭儀ばかりして居るやうな、其んな真似は兎てもく出来ませぬば、
 此儘の衣服で参殿して、家に居る量見でお邪魔致します、而して今
 一つの希望と申すは、お下物の魚は江州の湖水で取れた、新鮮なも
 ので無ければ嫌で御座る、御酒は伊丹の劍菱、ホロリと苦味があつ
 て喉を扶るやうなので無ければ飲みませぬ、これだけの事を御許し
 下さいますれば、必ず参殿致しませうとの挨拶に、使者は大ひに
 驚き呆れ、早々立歸つて事細かに復命した所が、大納言ニコニコ笑
 ひながら「如何にも希望通りにして遣はず」と仰せられた、かくて
 愈々其當日となつた所が多く、公卿方を始めとして、儒者文人等が
 澤山集つて各々行儀正しく座に着た、時しも山陽は黒木綿の布子に

五ツ紋の同じ羽織を着て、腰に長脇差を横へて、頭髮蓬々と月代の
 伸びた年の頃十六七の書生に、二升入の大瓢箪を昇がせ悠々として
 門内へ這入らうとする、門番驚き咎めて「誰だ」「誰でも無い日野殿の
 度々のお招きにより参つた者だ」と落着き拂つた山陽の言葉、門番
 は其姿の餘りに異様なるを見て中々承知しない「名前を聞かぬば通
 す事はならぬ」との拳突、此押問答を見た以前の使者は驚いて門番
 をたしなめ、早速大納言に言上すると、資愛卿自ら玄關まで出迎へ
 「能くこそ」と座に請しますると、山陽は行儀正しく居并んで居る一
 座の真中へドツカと坐し、遠慮會釋もなく早や書生に昇がした瓢箪
 から酒を出さうとする様子に、大納言は急に杯盤の用意をなさしめ